第十六章　樂屋裏から舞臺へ

一　誤算二つ

一九三九年九月一日、獨軍雪崩を打つてポーランドに侵入し、第二次大戰の幕は切つて落された。かねてのスターリンの〝戰爭來〟の見透しが現實化した。ポーランド軍は十日を出でない中に、獨軍に征服されてしまつた。ポーランド崩潰す！　と聞くより早く、ミンスク一帶に集結されてあつたチモシエンコ大將麾下の赤色軍は、何等の抵抗を受けずに、ドシ〳〵ポーランド領に乘込んだ。開戰直前に締結された獨ソ不可侵條約の附帶密約によつて、獨ソの間、早くもポーランド分割の協定が出來てゐたのである。この密約に指定してある線（現在のソ聯ポーランド國境）まで來て、赤色軍はパタリと行進をやめた。最前線の獨軍と赤色軍は、協定線上で交驩するといふ妙な場面を展開した。

ドイツ對英佛の戰局がグン〳〵展開して來た。獨軍が西や南で忽忙を極めてゐる間に、ソ聯はポーランドの東半を一兵も損せず一滴の血も流さずに占領した勢に乘じてバルチック沿海に手をのばし、いつの間にか、エストニア、ラトヴイア、リスアニアの舊帝政領を取りかへしてしまつた。そ

の邊までは、スターリンはたしかに、よくさきを見透うして、巧みに機會を利用したといふことが出來る。しかしその後も英佛との決戰の片付かぬ限り、ヒットラーは東に、即ちソ聯に向つて、向き直るまいと、たかをくゝり、隙があつたらバルカン方面にも手を出さうと虎視眈々たるものがあつた。

勿論スターリンはヒットラーがソ聯にとつて危險な存在であることをよく知つてゐた。結局は獨ソ戰ふ時が來ると考へてゐたことはいふまでもない。たゞヒットラーのソ聯へ對しての向き直りの時機について、大きな誤算があつたように思はれる。

まだ〳〵ヒットラーは東に向き直る餘裕をもたぬとたかをくくつたスターリンは、一九四〇年十月、首相兼外相モーロトフをベルリンに派して、ヒットラーと會見せしめた。モーロトフは、

第一、ソ聯はブルガリヤに赤軍を派遣し度い。第二、ソ聯はダーダネルス海峽航行の自由を確保するために、同海峽の重要地點數ケ所を占據し度い。

といふ野望を露呈し、先づドイツの承認を求めた。

いよ〳〵ソ聯の油斷ならぬことを感知したヒットラーは、先づバルカン平定を急務となし、一九四〇年秋から、一九四一年の春にかけて、その力をバルカン工作に集中した。ハンガリー、ルーマニア及びブルガリヤの三國はつひに一兵を損さずして、樞軸側に抱き込んだが、ユーゴ・スラヴイアだけは英佛及びソ聯の壓力が加はり、一旦樞軸加盟に調印し乍ら英佛側に寝返り、且つソ聯と不

可侵條約を結んだ。

恰度その頃、一九四一年三月、黨書記長スターリンは、モーロトフに代つて、ソヴエート內閣議長に就任した。モーロトフは外相專任となつた。

長い間、樂屋裏にかくれてゐたスターリンは突然自ら舞臺表てに出て來たのである。それは何故であらう。彼は樂屋裏に居乍ら、常に思ふ存分獨裁權をふり廻はしてゐた。彼はその性格からして黑幕政治家であるとのみ一般から觀られてゐた。そうしたスターリンが堂々とソヴエート政局の眞表てに乘出した。それは何故であらう。スターリンの首相就任は、世界に大きな疑問を投げつけ、スターリンの首相就任は、いふまでもなく對獨關係の逼迫を顧慮し、自ら重大危局に直面して對處しようといふ悲壯なる決意をしたのに外ならぬ。

果然、それから間もないこと、獨ソの關係はバルカン問題を中心に逐日險惡を加へて來た。

一九四一年四月匆々獨軍はダニューヴ河を越えてバルカンに侵入し、わづか四日間にしてユーゴスラヴイア軍を征服してしまつた。さてバルカン半島を平定した獨軍は、この次にどこへ向つて突き出るだらうか。トルコに進出するのではないか。世界の視線は期せずしてこゝに集つたが、獨軍の選んだ次の電擊作戰の目標は、トルコでなくて、ギリシアの南に横たはるクレタ島であつた。

クレタ島の攻略は、グライダーから落下傘部隊による、まことに見事な芝居がかつた作戰であつた。やがて獨軍はクレタ島の攻略を完了した。さてこの次に、獨軍はどこへ行くだらう。勿論クレ

タ島まで出て來た獨軍のこと、この次は隣りのキプロス島をつくであらう。次はアフリカへ、ついでシリアへ出るに違ひない。獨軍の目標は、南である。獨軍次の作戰は、スエズ運河の攻略であらう……と全世界はかく信じ切つてゐた。聰明なるスターリンもそう見てゐたらしい。然るにその時早くもヒットラーの指揮刀は、南から北を指してゐたのである。リスト元帥麾下のバルカン進駐軍は、一齊に急遽廻れ右して北方に移行した。

一九四一年六月二十一日から二十二日にかけての夜半、五百萬の獨軍突如として、ソ聯領に突入し、こゝに獨ソ兩大陸軍團は、干戈相見ゆることゝなつた。

まだ〳〵とゆつくり構へてゐたスターリンは、たしかにヒットラーに虛を衝かれた。兩雄の鬪爭は、實にもの凄い駈引である。いつも間髪を入れない。拔く手を見せない素早さである。不可侵條約を結んでおきながら、直ぐそのあとでこの條約の必要性のなくなる時機に備へる。片や西に忙はしと見るや、バルカンの空巢を狙ふ。他はバルカンに乘出し、いかにも南に行くかに見せて、突如北に向き直る……まことに虛々實々である。

開戰の當初、スターリンはもう一つ大きな誤算をなした。それは獨軍の本攻正面を見違へたことである。

二　スターリン線破れたり

最初スターリンは、ヒットラーの對ソ攻撃の主要正面は、ウクライナにあると見てゐたらしい。バルカン進駐のリスト軍は、手近かのウクライナ西邊に向つて移動して來た。獨軍の主力はこの正面に集結されたと見たスターリンは、西南方面軍司令官にソヴエート・マケンゼンといはれたブデヨンヌイ騎兵大將を任命し、その指揮下に赤色軍主力の大半を隷屬せしめた。しかるに獨軍の主力の三分の二は、中部正面に集結し、フオン・ボック元帥の指揮下に、國境突破の勢いに乘じて、ナポレオン街道を驀らに猛進を續け、その目指す目標は、明らかに赤都モスクワにあることを示した。

ソ聯はドイツに對して、二條の防禦線を用意した。第一線はこれをスターリン新線と名づけ、獨ソ新國境にわたつて急造したものである。第二線にスターリン本線があつて、北はフインランド灣のクラスナヤ・ゴルカ要塞を起點として、南は黑海沿岸ドニエストル河口にかけ、千六百キロにわたる蜿々長蛇の如きトーチカ線がそれである。

一九三七年春、ソヴエート政府は、スターリン本線の工事に着手し、例によつて大規模な囚人の强制勞働を行ひ、約二年半を費やして、全線の竣功を見た。同線はエストニアの國境にあるペイプス湖とその南にあるプリペット沼澤地を除くとあとは大森林を擁する大平原である。この大平原を幾多の河川が流れてゐる。その中にはドウイナ、ベレジナ、ドニエープル、ドニエストルの如き大

河がある。スターリン本線は、是等多數の湖沼と河川を利用し、要所々々に無數のトーチカを配列したものである。同線の特色は、其の奥行があくまで深いといふことにある。トーチカ網の前方には廣い銃砲の瞰射地域があり、後方には飛行機發着用のとれまた廣い野原がある。そうした廣場は三十キロ、四十キロ、ところによつては百キロ近くもあり、さすがに領土の廣大なソ聯だけに、惜し氣なく廣くとつた。

たゞしかしこうした廣場をつくるために、森森や村落の燒拂を決行したが、粗放なロシア人の仕事は中々面白い。三十キロ、四十キロの地帶を燒き拂ふとして、百キロも二百キロも燒いてしまつた。工事中、西部國境一帶各所に大きな森林火事のあつたのがそれである。

かくして出來上つたスターリン線は、勿論マジノ線や、ジークフリード線のやうな手のこんだものではないが、しかしこの線を突破しようといふ場合、トーチカからの砲擊に晒されねばならぬ。

スターリンはまづ新國境にそふスターリン新線で、一應獨軍の進擊を抑へる、同線が萬一破れてもスターリン本線で頑張る。その間に一千萬の大動員を行ひ、徐ろに逆襲に轉じようといふ作戰であつた。然るに第一に、ヒットラーの對ソ攻擊の時機と、第二に、獨軍主力の攻擊正面の二つを誤斷した結果は大變なことになつた。

何しろ虛を衝かれた赤色軍は、開戰の劈頭、中部正面至るところで、大ヘマをやらざるを得ない。先づこの方面の最前線にあつた赤色空軍は、二十一日の夜半、各飛行場に雲をおさめて休んでゐる

ところを、即ち寝込みをつかれたのだからたまつたものでない。戰鬪機二千臺は一夜の中に粉碎されてしまつた。

獨軍中堅の〝楔の尖端〟は瞬く間にブレスト・リトウフスクにおいてスターリン新線を突破し、その餘勢を駆つて、早くもミンスクにおしよせ、その東方に横はるスターリン本線にのしかゝつたミンスク駐屯の赤色軍三十萬は獨軍のために包圍され、やがて降伏の外ないことゝなつた。同時に東プロシアの東南角から獨軍の有力部隊が、グロドノ要塞を一蹴して、南下したため、こゝにベーロストツク駐屯の赤色軍の大部隊もまた獨軍に包圍され全軍殲滅の悲運に會することゝなつた。ミンスクに突進した獨軍機甲部隊の主力は、さらに東進してベレヂナ河をわたり、七月十六日つひにスターリン本線を突破し、一氣呵成、ナポレオン街道の要衝スモレンスクに入つた。

七月中旬から下旬にかけ、獨ソ戰爭は、北はバルト海から南はドニエープル河に至るまで、全線にわたつて激戰が續けられた。八月上旬ソ聯軍の抵抗漸やく鈍ぶり、スターリン線は北、中、南の三正面、いづれも突破されてしまつた。八月六日、獨軍總司令部は、スターリン線攻略戰の一段落を機として、それまでの作戰計劃につき總括的報道を發表した。獨軍は北部方面においてはソ・ラ國境、中部方面ではスモレンスク、南部方面においてはジトミールにおいて、各々スターリン線を突破し、捕虜八十九萬五千、鹵獲戰車一萬三千百四十五臺、大砲一萬三百八十八門、飛行機九千八十二機を數へた、といふ素晴らしい發表である。その翌七日スターリンは情報局次長ロゾーフスキ

ーをして、モスクワ駐在の外國新聞記者に〝アラビア夜話〟と題して面白い發表を配布せしめた。その發表に曰く、

獨軍はスターリン線を突破したといふけれども、元來スターリン線といふものが、全然この世に存在しない。一千六百キロといふ長距離にわたり、どうしてトーチカ連續の防禦線を築造出來よう。ありもしないスターリン線を突破したといふのは、ヒツトラー一流の〝アラビア夜話〟である。

あれだけ大きな敗戰を〝アラビア夜話〟にしてしまつた。その當時はむしろおかしく思つたが、あとになつて、敗軍の將スターリンも中々餘裕綽々であると思つた。こうした危局に直面して、餘裕綽々たるスターリンにして始めて、頽瀾を既倒に回し、敗退から反攻へ、最後の勝利へ……漕ぎつけ得たといふべきではあるまいか。

三　祖國危ふし

開戰當初における二大誤算は、たしかに赤色軍にとつて、痛事であつた。しかしその後における作戰、外交、國内政策等々いづれの方面においてもスターリンはたしかに善謀、善處したといへると思ふ。開戰劈頭の大敗北を一轉して最後の勝利に漕ぎつけたのは、要するに戰時におけるスターリンの善斷善處の結果であるとしなければならぬ。

何しろ若い時から辛酸をなめ、幾度か死線を重ねた苦勞人スターリンである。如何なる難局にぶつかつても、クレムリンの主人公は驚ろかぬ。豪然としてゐる。大きなマドロス・パイプを燈ゆらしながらニコ〳〵笑つてゐる。

開戰後間もないこと、ミンスクとベーロストツク駐屯軍は全滅した。スターリン線は突破されたその頃のこと、スターリン首相は自らマイクの前に立つて、全聯邦國民に向つて悲壯な演說を放送した。彼は卒直に敗戰の事實をありのまゝ報告して〝祖國危ふし！〟と叫んだ。このスターリンの〝祖國〟の一語は、ソ聯人をして一齊に奮起させた。祖國のために戰おう、生命を捧げよう……敗れて却つてソ聯軍の士氣があがつた。

もしあの時、スターリンが〝共產革命危ふし〟といつたようなことをいつて、國民に訴へたとしたならば、ソ聯人は果してあれだけの熱と犧牲心をもつて起つたであらうか。

やがてソ聯の新聞、放送等々あらゆる宣傳機關は、總動員をもつて〝第二次祖國戰爭〟の標語を高らかにあげた。ナポレオン軍を破つてロシアを救つたのが、第一次祖國戰爭で、今度のドイツ軍との死か生かの際どい戰ひが第二次祖國戰爭であるといふのである。これほどロシア人の愛國心をそゝる標語は他にあるまい。スターリンはたしかに〝祖國危うし〟の一語でロシア人の心をとらへたといへるであらう。

第十七章　スターリン訪問記

一　唯物史觀の修正

スターリンがマルキシズムに修正を加へた一つの重要點は、個々の人を高く評價し出したことである。人類の歷史は、經濟の動きであつたといふ唯物史觀に、修正を加へ、否々、それだけではない。〝個々の人の力も與つて大をなしてゐる……〟となし、前記の如くロシアの歷史を再檢討し歷代のツアーや、ツアーをとり卷く政治家將軍連の役割を大きく書き直した。かくすることによつて〝現代もまた然り、黨のリーダーを敬愛し其の指揮命令に服從すべきである〟といふことを言外に含め、さかんに英雄崇拜、リーダー尊敬の宣傳を始めたことは上記の通りである。今日世界で、ソ聯ほどリーダーを、クレムリンの主人公を、スターリンを〝偉大なる先生〟〝民族の父〟などゝいつて、尊敬し推戴してゐる國が、他にあるであらうか。しかしこの點におけるマルキシズムの修正は、決して間違つてゐたとはいへない。今次の戰爭におけるソ聯の惡戰苦鬪、陰忍持久、そして最後の勝利への過程におけるスターリンその人の個性は、たしかに大いにものをいつたとしなければならぬ。スターリンは如何なる人か。スターリンの個性を記述するに當つて、私は先づ自分のスタ

ーリン訪問の記憶を呼びおこして見度いと思ふ。

二　〝赤くない外國人には會はぬ〟

本文の記者が、初めてスターリンを訪ね、親しく彼と語つたのは、一九二五年七月一日のことである。その頃のソ聯は、レーニンの死後、巨頭間の勢力爭ひで紛糾を極めてゐたが、しかし黨内の中心勢力は、もうすでに書記長スターリンであることが、はつきりわかつてゐた。私はレーニン亡き後のロシアを知るには、先づスターリンをつかまへなくてはならぬと考へた。

近年のスターリンは、殊にソヴエート内閣議長となつてからの彼は、その首相としての職務關係においても、外國の使節や、各方面の代表者と面接するのであるが、二十餘年前のスターリンは、頑固一徹の主義者として、社會主義者ならざる外國人には、一切會はないことにしてゐた。然らばスターリンはどうして、〝資本主義、帝國主義の機關〟と目してゐる毎日新聞の代表者たる本文の記者に面會を許したか。

本文の記者は、インターヴュー取りにおいて、幾多成功の記錄をもつてゐる。特に革命のロシアにあつては、十月革命の三巨頭レーニン、トロツキー及びスターリンのインターヴューを取揃え得たものは世界にたゞ二人、西のエッチ・ジー・ウエルスと東の私だけであるといはれてゐる。ロシアにあつては革命の指導者、中國にあつては中原逐鹿の群雄殆んど悉くと親しく會見し、今なほ眼

をつぶつて瞑想する時、兩國巨頭の風貌が次ぎ〳〵と浮んで來る。

本文の記者がとり得たインターヴューの中で、紙面に最も大きな光彩を放つたのは、何といつても、一九二〇年五月四日クレムリンで親しく會つた革命の父レーニンとの對話記であるとしなければならぬ。會見を終つてクレムリン城を出で、宿舍に歸るや、一氣呵成、書きなぐつた。檢閲の關係上先づロシア語で書きあげ、ついで自らこれを日本語に譯した。……それは約一千語の特電で、勿論大毎、東日紙上大きく載せられたばかりでなく、レーニン全集の中にも採錄された。何しろソヴエート政府初代の首相レーニンが始めて、日本の新聞記者に與へた最初のそうしてまた最後の談話であるから、當時日本に大きなセンセーションをなしたのは當然のことである。これに反し、私が苦辛慘憺、辛うじて成功したスターリンとの會見記は、大毎、東日兩紙共に小さく取扱ひ、一向世間の注意をひかなかつた。それは一つはスターリンがまだその頃國外でそれほど偉らい人物として知られなかつたこと、第二にはスターリンの談話があまりに赤い氣焰であつたので新聞社の整理係が手心減を加へたことに因つたのであり今から考へてまことに惜しいことであつた。

およそ相手國最大の大ものとの會見を得ることの至難なることは勿論であるが、スターリンの場合もう一つ大きな障碍があつた。それは前記の如く頑固一徹な主義者スターリンの〝赤くない外國人には會はない〟といふ鐵則である。どうしてこの人に會ふ機會を摑むか。私は一九二五年の春、日ソ條約成立直後の入ソに際し、この好機逸すべからずと考へた。

三　インターヴューに成功す

同年の夏、本文の記者は、コーカサスから、裏海を越えてペルシア（今のイラン）に遊んだ。その歸り途、再び裏海の波を越えてバクーへ行く汽船、コーカサスの山間を走る汽車の中でスターリンのインターヴューをとる作戰に色々あたまをひねつた。モスクワへ歸るや否や、私はスターリンにあて〻一通の手紙を投函した。その手紙に、

私は一九二〇年レーニンを訪ね、ソヴエート政府の民族政策について、色々横感ある意見を聞いた。今回の訪ソを機として、今更らに同じ問題について、ソヴエート政治家中、民族政策の第一人者といはれる貴下の御意見を併せて聞き度い……

と記したのである。

簡單な内容ではあるが、スターリンはこの手紙によつて、主義者ならざる外國人には一切會はぬといふ鐵則を自ら枉げた。一九二五年六月末、私がスターリン宛ての手紙を投函してから、二、三日たつて、スターリンから〝少し風邪氣味で身體の具合が惡いから、四、五日待つてくれ〟といふ挨拶である。〝それではこの次のシベリア急行で、出立する豫定であつたが、そういふことなら、一汽車延ばしませう〟と返事したところ、スターリンから〝七月一日に來てくれ〟といふ通知が來た。

忘れもせぬ一九二五年七月一日、本文の記者は、ノーワヤ廣場に建つ五層の建物ボリシエウイキ＝ソ聯共産黨本部に、スターリンを訪ねた。さすがに共産黨の本部だけあつて頗る嚴重である。黨員ならざるものに對しては特に嚴しい。入口の受付で、旅券を取りあげてしまふ。それから二階の入口でも査問があつたように思ふ。色々の手續を終つて、最上層の五階に通された。五階の取りつきの部屋は秘書室で、そこにはメフリス（現在のソヴエート閣僚）とトルスツーハの二人がいそがしそうにしてゐた。私は早速メフリスに案内されて、大廣間のような書記長室に入り、スターリンの前に立つた。スターリンはいつもの通り、粗末なカーキ色の詰襟服（徽章のついてゐない兵隊服）を着て、風邪のせいか、少しくやつれて見へた。彼は机から離れて、私を迎へ、握手の手を差しのべ乍ら〝余もまたアジア人なり〟（ヤ・トージェ・アジアート）といふ慇懃な最初の挨拶であつた。ついでスターリンは、椅子に腰を下し〝お掛けなさい〟といつて、私に机の向側の椅子をすゝめた。二人はかくして、机を挾み、話を始めた。〝病氣をしてゐたので大變長い間待たせて濟まない……〟彼はもう私が一急行延ばしたことを知つてゐる。そこで私も〝いや、貴方の御意見を拜聽するのに、一週間位延ばすのは何でもない〟といふと、スターリンはニッコリ笑つて〝あなたは少し誇大に言ひませんか〟といふ。私の答を御世辭だと考へたらしい。そこで私は少々理窟つぽいとは思つたが〝私は新聞記者を十數年やつてゐるが、まだ貴て事實を誇大にしたこともなければ、縮少したこともない〟といふとスターリンはまたニッコリ微笑して〝それもそうだね〟といつ

たような表情だつた。

本文の記者とスターリンとの對話は主としてソヴエート政府の民族政策に關する問答であつた。この會見は、スターリンが社會主義者でない外國記者に面會を許したといふことだけでも、當時モスクワ駐在の外國記者に大評判となつた。特にスターリンの最初の挨拶の言葉〃余もまたアジア人なり〃が、注目をひいたらしい。U・Pのモスクワ特派員フレデリック・クーは一九二七年九月十四日付の露都特信において、

スターリンはかつて新聞記者にインターヴューを與へたことがなかつた。しかるに彼は最近この慣例を自ら破つて〃大阪毎日〃の特派員に會見をゆるした。モスクワの政界はこれを聞いて驚愕した……日本新聞記者がスターリンの居室に入るや、彼はその椅子から立つて、あゆみよりつゝ〃余もまたアジア人なり〃と語つて、握手を與へた。何たる劇的シーンであつたらう。否、劇的シーンどころの騒ぎではない。スターリンの日本記者に對する歓待ぶりと、汎アジア的表情とは、實に〃新アジア同盟の黎明〃を世界に宣言したものである……

と仰々しく報じたものである。

四　個性をかくす

本文の記者はレーニン、トロツキー、スターリン即ち十月革命三巨頭のインターヴューをとり揃

えた。前二者とスターリンとの對照は私にとつて特に面白い思出のたねである。レーニンは私の鼻先へ、あの雀斑だらけの顔をつき出し、私の顔に唾をかけんばかりに、談論風發の概があつた。トロツキーは私一人相手の對話でも、大勢を前にして、大演說でもするかの如く、美辭麗句を並べ、ゼスチュア交りで雄辯を揮つた。彼の談話はそのまゝ文章になつた。然るにスターリンと來ては、レーニンの熱もなければ、トロツキーの芝居氣もなく、一見彼は極めて平々凡々のやうに見える。聲も低く、ニヤリ〳〵笑ひ乍らものをいふ。しかし話が一度レーニンの事に及ぶと、襟を正しうして〃レーニンは私の先生で、何事もみな先生から敎へてもらつたのだ〃と必らず眞摯な態度でそれを判然といふ。

低い聲で、ニコ〳〵笑ひ乍ら、輕いユーモアを交へて語る……そうした平々凡々振りに、却てスターリンの眞の偉さがあるのではないか。

スターリンに親しく接し、終始ニコ〳〵顏、そして慇懃丁寧な應待を受けた時の本文の記者の感想は、當時大毎、東日兩紙に寄せた特電の中にも記した如く〃スターリンはその強い個性を、すつかりかくしてしまつた〃といふに盡きる。

昔から圖拔けて傑出した偉人は決して其の强いところを見せない。本文の記者は在外生活中主としてロシアと中國の政治家や軍人と會つたのであるが、中國で會つた人達の中でも、段祺瑞、張作霖、吳佩孚、そして蔣介石、いづれも一流どころの大ものは、決して大聲をたてず、低いやさしい

聲で語つた。楊宇廷、張作宗等といつたような二流どころは、徒らに大言壯語するのみ。老獪なる馮玉祥は、時に今様項羽の如く大聲でがなりたて、時に低い猫撫で聲でものをいつた。要するに大ものは尊大ぶつたり、強がりをいはないものである。スターリンはその名のもの語る如く、鋼鐵の如き強烈なる意志の持主で、時にもの凄い立廻りや、政治、肅清を平氣でやつてのける恐ろしい人であるに相違ないが、さて親しく會つて見ると、こんなに溫厚朴訥な平々凡々人があらうかと思はしめる位である。人をして知らず識らずの間に親しましめるものがある。そこにスターリンの眞の偉さ、強さが潛在するのであらうか。ニコ〳〵笑ひ乍ら、低い聲で、靜かにもの語るスターリンの前に、一億七千萬のソ聯人は畏服して頭をあげ得ない。怒髮天を衝くの概のあつたツアー・ピョートル大帝よりも、ニコ〳〵笑ふ無冠のツアー・スターリンの方が、どれほど睨みが遠く利くか〝鐵の人〟スターリンのこうした懇切丁寧な人との應接振りは、たとへば、最近のソ聯映畫〝偉大なる轉換〟にも、屢々出て來る。實際やわらかいオブラートに包まれた個性の强さは今度の大戰に際して、最もよく發揮された。對獨戰最初の二年は、ソ聯軍連戰連敗、クレムリンへは毎日死傷幾萬、幾十萬といつたような敗戰の悲報が、頻々として飛來する。前線の危機は刻々迫つて來る。しかしクレムリンの主人公は、平常の如く冷靜そのものである。ニコ〳〵笑つてゐる。時に側近のものにユーモアを交りでやさしく呼びかける。こうした物に動ぜぬ落ち着きあつてこそ、スターリン線破れても、〝あれはアラビア夜話だ〟といつて各國記者を揶揄する餘裕があつてこそあの危局を切り拔

け、最後の勝利に漕ぎつけることが出來たのである。ソ聯が國を擧げて難局に直面する度毎に、私は一九二五年七月一日モスクワで親しく會つた時のスターリンを、ニコ〳〵笑ふ、そして低い聲で私と對話したスターリンを想起するのである。

第十八章　戰時體制へ

一　ロシアへ還元

獨ソ開戰後、スターリンの〝廻れ右〟の政策轉換は、いよ〳〵角度を深めた。開戰後における最も顯著な〝舵の取替〟は、民族政策と宗教對策の二つであつたと思ふ。

ソヴエート政治は、その最初の十數年間、いはゆる〝レーニン、スターリン民族政策〟を固執し少數民族の地位をグン〳〵引上げ、大民族スラヴをどこまでも抑へて行く方針をとつた。少數民族をして、自治共和國をづくらせ、これに彼等に比して何十倍も大きなロシア民族共和國と同格の地位を與へた。そうした國家の組織變革に際して、國號を〝ソヴエート聯邦〟と改め、つひに國號から〝ロシア〟の名稱を取りのけてしまつたのがスターリンである。スターリン自らが少數民族出身であるばかりでなく、ボリシエヴイキーの巨頭の中には、ユダヤ人のカガノウイツチ、アルメニア人のミコヤン、ジョルヂア人のベリア等々同じ少數民族の出身者が少くない。こうしたスターリンの時代となつて以來、大ロシア人がいよ〳〵頭があがらなくなつて來たのも、當然のことゝしなければならぬ。

しかしこうしたスターリンの民族政策も、〝戰爭來〟を見越しての國策轉換と同時に俄然反對の方向に逆轉を始めた。この逆轉は、對獨開戰後、いよ〳〵スピードを早めた。即ち帝政時代と同じように、スラヴ民族中心主義に打つて變り、すべてが、もとの〝ロシアへ還元〟しようといふことになつた。それは何のためか。矢張り〝必要〟に迫られてのリアリズム政策に外ならぬ。即ち戰爭の重荷の大部分を背負つて行くのは、スラヴ人である。ロシア人である。そこで先づスラヴ人、ロシア人を尊重しなくては、戰さに勝てない。スラヴ人、ロシア人の愛國心を鼓舞し、その犧牲心、その奮戰力闘によつてのみ、ソ聯は戰ひ得るのである。ソ聯からスラヴ民族を除いたならば、その戰力は小さなものになつてしまふ。個々の少數民族全部を併せても、たいした力にはなり得ない。ソ聯の中堅民族は、依然として、スラヴ・ロシア民族である。スラヴ民族こそ、ロシアをして偉大なる國家たらしめた。スラヴ民族は過去において、チャールス十二世や、ナポレオン軍さへ敗つた光輝ある歴史をもつてゐる。今度の對獨戰においても、スラヴ民族が、奮起して護國の干城となり祖先の名を恥かしめないであらう……

かくてかゝる〝ロシアへ還元〟と同時にソ聯の內外に汎スラヴ運動が再燃し始めた。

二　汎スラヴ運動再燃

ロシアへ還元と同時に、戰時ソ聯の內外に汎スラヴ運動が俄かに火の手をあげ出して來た。蓋し

兩者は昔から關聯性をもつもの、相前後して擡頭したのは、必然のことである。

汎スラヴ運動もまた〝スターリンの轉向〟の一つであるとしなければならぬ。つひ數年前まで大きなスラヴの總本家ロシア民族を抑へて行くには、スラヴの各分派民族を、分離させ、その統合を阻止することが、何よりの緊急事とされた。然るに今日は全く逆を行き、スラヴ系の各民族は、互ひに提携し、協力して行かなければならぬといふことになり、モスクワで戰爭中、度々大規模な汎スラヴ大會が開かれた。ソ聯外のスラヴ、たとへばポーランド、チエコ・スロワキア、ブルガリヤユーゴ・スラヴイア等々の代表者も參加して、さかんに〝汎スラヴ主義〟を高唱した。

三　宗教の復活

獨ソ戰爭の第三年、即ち一九四三年、スターリンはもう二つ大きな政策轉換を決行した。その一つはコミンテルンの解消で、今一つは、宗教の復活である。

一九四三年九月四日、スターリンはクレムリンに、ロシア正教の最高僧位にあるモスクワ大主教セルゲイ、レニングラード大主教アレクセイ、元キーエフ及びガリシア大主教ニコライを招致し、〝ソヴエート政府は、主教會議（ソボール）を再開して、ロシア正教會の總主教（パトリヤルフ）を選立することに、何等異議を挿まない〟旨を告げた。宗教否認から、信仰尊重へ、これまた百八十度の轉向をなしたものに外ならぬ。

九月八日、主教會議は鳴物入りで、モスクワに開かれ、革命後最初の正式な全ソ聯正教の總主教に、モスクワ大主教セルゲイが推選され、同月十二日、セルゲイ師は、モスクワ大寺院で、賑々しく總主教の職に就任した。

いふまでもなく、既往二十餘年のソヴエート政治は、極端な宗教壓迫、寺院虐待の連續であつたボリシエヴイキーはたゞに〝宗教は國民を毒する阿片なり〟といふ唯物主義のイデオロギーから、信仰を否認したばかりでなく、同時に、〝寺院は反革命運動の巣窟だ〟となし、寺院を閉鎖する。僧侶を追放する、百方宗教排擊、寺院壓迫を續けた。ヤロスラフスキーの主宰する宗教反對專門の雜誌〝ベズボージニツク〟（無神）が刊行され、寺院、僧侶、信仰、神佛をあたまつから愚弄し、攻擊したものである。然るに二十餘年間、かく虐待し、壓迫し來つた宗教が、軍國ソ聯にとつて絶對必要のものゝ一つとなつて來た。

由來ロシアの歴史は、宗教と興廢をともにして來た。宗教に倚らずして、民族愛、祖國愛の精神を鼓舞することが出來ない。ロシア人をして、死を恐れざらしむるものは、實に信仰である。昔の露軍は十字架を捧げて陣頭に起つ僧侶のあとについて、突擊に移つたものである。

對獨戰爭は相手が強いだけに、戰鬪苛烈を極め、到るところ屍山血河の慘劇を演ずる。スターリンが今次の對獨戰爭に〝祖國戰爭〟の名を付けたのも、祖國愛によらねば、國民の精神作興が期し得られぬとなしたからである。そしてロシアの愛國心と信仰とは、二にして一つである。宗教心は

ロシア國民性の一つの大きな要素であつて、二十餘年にわたるソヴエート政治もこの國の民族性を滅却することが出來なかつた。否、今や却てこの國民性の要素を培養することによつて、ソ聯國民の祖國愛、愛國心、犧牲心を昂揚しなければならぬことゝなつた。轉換もまた甚だしいといはなければならぬが、これもまた冷徹なるリアリズム共産主義のよつて來るところではあるまいか。

これよりさき、獨ソ開戰と同時に、スターリンは逐次寺院に對して宥和政策をとり、寺院側でも國力强化、祖國愛運動に乘出し、政府の政策を側面から支援する態度に出た。ソ聯各地の寺院ではさかんに戰勝の祈禱が行はれ、貴重な傳來の寶物、黃金の十字架等を寄附するものなどがあり、また高僧の中には、進んで公共團體に加はり、國民運動の指導に當るものさへあり、寺院とクレムリンとは日一日に接近しつゝあつた。しかし一九四三年夏までのソ聯の寺院は、依然として〝陰の〟的存在であつたことは爭へない。然るに同年九月、前記の如く勸說によつて、主教會再開總主教職推選を見るに至り、正教寺院は、いよ〳〵天下晴れての〝公然の存在〟となつた。寺院の復活は、ソ職人の生活を一變せしめるものでなければならぬ。金ピカの法衣を着た僧侶が各地の街頭に見受けられる。聖書や宗教書がさかんに賣れ出す。八百八寺の鐘が朝夕鳴り響く。善男善女の寺院參詣が毎日その數を增して行く。ソ聯は宗教關係においてもグン〳〵昔のロシヤに還元し出した。

四　戰時民心策色々

以上の如く、勝たんがためのイデオロギーの轉向、國際主義から國家主義へ、レーニンからピョートルへ、宗教撲滅から信仰尊重へ、少數民族優遇から、汎スラヴ運動へ……グン〳〵舵の方向をかへて來たスターリンは、同時に色々の民心對策を講じ出した。

何しろあの恐ろしい肅清の大鉈をふり廻した直後のことで、クレムリンはゲ・ペ・ウとともに國民の怨府となつてゐる。そんなことで强敵相手の戰爭が出來ない。そこで前にも記した如く、一九三八年の歲晚におし迫つて、突然肅清停止を聲明する、ゲ・ペ・ウ長官を更迭する、新長官ベリアは、ニコ〳〵の菩薩顏で登場する。明けて一九三九年に入ると、歐洲の風雲はいよ〳〵急を告げて來た。今度は更に一歩を進め先づその第一が色々の勳章の制定、第二が〝ソ聯の英雄〟の稱號、第三が〝月桂冠スターリン賞金の授與であり、第四が肩章の復活であり、第五が特定必需品、たとへば冬季用のオーバシウスの配給等々手をかへ、品をかへて、思ひ切つた措置を斷行するのである。

冬季足の凍ることは、ロシア人の最も嫌ふところである。そこを狙つて戰時ゴム大拂底の折柄にも拘らず、ウラルやクズバスの重要產業地方の住民に、ガローシ（オーバシウス）の大配給を行つた。軍人や官吏の肩章は、十月革命當時〝これ帝制政治の表象なり〟と云ひ、道行く士官の肩からもぎとる。これに抵抗した士官に對しては、その場でリンチを行つたもので、本文の記者も當時ペテルブルグの街頭で、そうしたリンチを幾度も見せつけられた。しかるにその肩章がすつかり昔と

同じく復活され、スターリン自ら元帥の肩章をつけることゝなつた。

月桂冠賞金は一等が二十萬留、二等が十萬留、三等が五萬留等、三、四種にわかれてをり、主として、科學と藝術の方面の功勞者に毎年一度宛、總花的にバラまかれる。その中には學士院會員もあれば、工場の技師もある。小說家もあれば、俳優もある。

第十九章　民族政策の逆轉

一　資本主義の〝背面攻擊〟

忘れもせぬ一九二〇年五月四日、本文の記者がクレムリン宮にレーニンを訪ねた際、談偶々被壓迫民族問題に移つた時、〝東洋と西洋と、どちらにコンミュニズムの成功の機會が多いか〟との私の質問に答へて、レーニン曰く、

眞正のコンミュニズムは今のところ、西洋にしか成功し得ない。然し西洋の列强は、東洋弱少國の搾取によつて、自家の富を增しつゝあるが、これと同時に彼等はまた東洋の植民地を武裝し兵をねらしめ、以て西洋は東洋において、自ら己を埋める穴を掘つてゐる……

それから五年經つて、一九二五年夏再びモスクワに遊んだ際、本文の記者は、スターリンを訪ふて、同じ問題をくり返し、

近時中國、印度、ペルシア、埃及その他東洋諸國において、解放革命の運動がさかんに頻發しつゝあるが、これは西洋列强が、いよ〳〵レーニンのいへる如く、自ら東洋で掘つた墓穴に己を埋める時が近づいた前兆であるのか。

との質問を出したところ、スターリンは、

然り、余もまたたしかにそうだと思ふ。植民地は帝國主義の背面である。背面の根據地の革命化は、たゞに帝國主義をして、その後方の守りを失はしめるのみでなく、西洋革命の危機に對して決定的衝動を與へるもので、われ等はこれによつて、帝國主義を覆へさねば止まないものである。背面と正面の兩方から、攻めたてられた帝國主義は、結局滅亡の外無からう……

と答へた。

レーニンが東洋の民族解放運動に多大の注意を拂つたのは、在野當時からのことであるが、彼がいよ〳〵この運動について、自ら具體的政策をたてゝ、これに臨んだのは、一九二〇年夏モスクワに開かれた第三インターナショナル（コミンテルン）の第二次萬國大會の時のことである。同年の六月四日、即ち同大會開會の直前、本文の記者はレーニンをクレムリン宮に訪ふたのであるが、その時已に彼の卓上には、演說の原稿が、うづ高く積まれてあつた。レーニンが私を案內して行つた外務人民委員部東洋課長ウォズネセンスキイに、東洋の形勢に關して、種々の質問をなし、また資料の補足について、色々內命を下したことなど、今なほ私の記憶にのこつてゐる。第二次大會開かるゝや、レーニンは自ら東洋問題の報告役をひきうけ、弱少民族解放の大抱負を獅子吼した。

第三インターナショナルの〝團結せよ、萬國の被壓迫民族よ〟といふ標語は、實に第二次大會に提出されたレーニンの基本政策から出て來たものである。

レーニンの〝民族及び植民地對策基本案〟はその本文十二ケ條において、先づブルヂョア・デモクラシーの唱へる人類の平等主義の虛僞なることを切論し、また歐洲第一次大戰後に締結された講和條約の缺陷を難詰し、その民族自決主義と國際聯盟をとらへて、被壓迫階級及び弱少民族を瞞着するものであるとなし〝第三インターナショナルの弱少民族及び植民地政策の根本は、各國勞働階級相互の接近をはかるにある。何となれば、これなくして資本主義に打ち勝つことが出來ない。從つてまた、民族の不平等狀態を打破することが出來ないからである〟と說き、次いで〝ソヴエート・ロシアにおいて樹立された勞働者專制は、必然全世界のブルジョアを敵としなければならぬ。從つて他の一方、ソヴエート聯邦は、おのづから、植民地及び被壓迫民族の解放運動を味方に引き入れねばならぬ。彼等もまた革命のプロレタリヤと同盟するに非ざれば、自家の解放をかち得る途がないのである〟との前提の下に〝あらゆる民族解放運動はこれを先づソヴエート・ロシアに結びつけなければならぬ〟との根本方針を指示した。次いで〝聯邦組織は各民族が團結を完成するまでの過渡形式である〟と云ひ〝ロシアはこの政體によつて、他の民族共和國との關係を確定してゐる。第三インターナショナルの使命は、この政體の上に、新らしい聯邦組織の發達を期するにある〟として、外はアゼルバイチヤン、ウクライナ、內はバシキール、韃靼等の自治共和國との關係を例證し世界をソヴエート聯邦化せんとする大抱負を呼號した。歐米列强における共產黨の使命としては、〝その自國政府の政策に反抗してその被征服民族、及び植民地の解放運動を援助すべきである〟と

云ひ、文化のおくれた國に對しては、共産黨の採るべき方針として、左記數項をかゝげた。

一、各國共産黨は弱少民族の革命解放運動を援助せよ。但し、その援助の程度は、當該國の共産黨と協定すべく、特にその國と經濟關係の最も密接なる國の勞働者においてこれが援助の責任を負ふべきものとする。

二、宗教方面の中世紀的反動勢力と戰へ。

三、反回教主義及び反アジア主義は、歐米の帝國主義と戰ひつゝ、同時に土耳古もしくは日本の帝國主義を強大ならしむるものであるから、これを排斥せよ。封建制度の殘骸を滅却し、また農民運動の革命的色彩を濃厚にし、出來得べくば、農民及び他のあらゆる被壓階級を結合し、ソヴェートを作り、以て西歐の共産プロレタリヤと、東洋の革命農民運動との間に、鞏固な同盟を建設することにつとめよ。

四、弱小國の特權階級は、往々帝國主義國の援助をかりて、政治上のみの獨立國を形成し、經濟、財政及び軍事上において、帝國主義國の屬領狀態に陷ることがある。共産黨はこの傾向と戰はねばならぬ。

附帶條項九ケ條においては、更らに具體的政策を說き、

一、第三インターナショナルは先づ中國及び印度における革命運動との相互關係を確定しなければならぬ。歐洲第一次大戰によつて、今や、世界の資本主義は、一點に集注され、歐洲の勞働

運動は、非歐洲の被壓迫國の解放運動と密接不離の關係にある。

二、歐洲の資本主義は、主としてその力を植民地から搾取してゐる。かゝる帝國主義國はアジア及びアフリカの幾億萬の人民を奴隷となし、同時にまた自國自身の勞働者を壓迫してゐる。植民地から搾取する暴利こそ、實に現代資本主義の主要なる資源である。

三、歐洲列强がその植民地を失ひ、自國內に勞働革命をひきおこすとき、即ち歐洲の資本主義の倒れる時である。從つて、世界革命の勝利のために、植民地と勞働者とはその解放運動において、協力を必要とする。

四、帝國主義は自國の工業保護のために、東洋國民の經濟的發達を妨害した。これがために、東洋は世界の經濟的進步からたちおくれとなり、多數の人民は農業に從事し、原料品をとられるのみである。されば植民地の革命はその第一步において、外國勢力を驅逐せねばならぬ。

五、二つの互ひに相反抗する運動がある。その一つはブルヂョア民主主義の民族運動で、この運動は資本主義の制度存續のまゝで、民族を解放せんとするものである。他の一つは勞働者及び農民があらゆる搾取勞力の羈絆から脫却せんとする運動である。前者は常に後者を制し、これをその支配下におかんとする。從つて革命の第一步は、外國勢力の驅逐にあるが、その最も大切なる使命は、勞農團體を組織してソヴェート共和國の建設に邁進するにある。かくして、文化のおくれた國にあつては勞働民衆は先進國のプロレタリヤの指導下に立つて、その階級意識の發達に

件ひ、資本主義發達の過程を經ずして、コンミュニズムに進むであらう。これ等の國々には、どこでも、已に組織だつた革命黨が存在してゐる。共産黨はこれらの既成政黨と提携し、それを通じて革命運動に進むべきである。

六、植民地における革命においては、共産主義の原則を適用した土地問題の解決を急ぐべきである。土地の分配等の小ブルヂョア式改革主義のプログラムにとゞむべきである。然し、さればとて、植民地の革命指導權をブルヂョア民主々義者の手に渡してはならぬ。共産主義の思想を宣傳し、勞農ソヴエートをつくることに、努力しなければならぬ。これ等植民地の勞農ソヴエートは、やがて他の先進ソヴエート共和國と協力して全世界の資本主義を打ち倒すであらう。

以上の弱少民族及び植民地對策基本案はレーニンが渾身の經綸を傾倒し、特にスターリンの意見を加へて作製したものであつて、ボリシエウイキーの東方政策は、實に同案をスタートとして、動き出したのである。

私は特に一九二〇年第三インターナショナル大會の右の決議を詳記したが、それはその後のスターリンの民族政策、特に彼の第二次大戰後の世界政策を檢討する上において、極めて重要な資料であるとなしたからである。

以上によつて明らかなる如く、レーニンは第三インターナショナル（コミンテルン）の行くべき道として、第一、西洋のプロレタリア革命の强行進軍と同時に第二、東洋の弱少民族の解放運動の

二つを指示し、兩者における成功相俟つて始めて、世界革命の大望が達し得られるとなした。果して復活後の第三インターナショナルは、西と東の兩方面に向つてその〝赤い手〟をのばした。西は資本主義の〝正面〟東はその〝背面〟であるとして、同時攻擊に移つたのである。

第三インターナショナルの第一次總裁にはレーニンの指名によつてジノウイエフが推擧された。然しジノウイエフには主として西洋革命の促進、即ちいはゆる〝資本主義の正面攻擊〟が託され、東洋方面の〝資本主義の背面〟は、民族政策擔當のスターリンに一任されたようである。

ジノウイエフ總裁時代の第三インターナショナル（コミンテルン）は西歐各國の戰後の動搖に乘じて、さかんに〝赤い手〟をのばした。ハンガリーの革命は三日天下に終つたが、ドイツの共産黨は一時大いに努力を張つた。英國でも政權が勞働黨の手に歸して、コミンテルンの活動は相當目由になつて來た。しかしジノウイエフの得意時代はまことに短期間で、間もなくドイツにヒンデンブルグの反動が勢を得て、共産黨は黨首リーブクネヒト、ローザ・リュクセンブルグを失つた。英國もまた保守黨が勢力をもり返し、逆に〝ジノウイエフの手紙〟を暴露して、コミンテルンに大きなけちをつけた。フランスではボアンカレーやブリアンなどボリシエウイキーとは氷炭相容れない〝白色政治家〟がしつかと政權を把握して、反共政策の手をゆるめない。政治の形勢は日とともにジノウイエフ等に不利となり、第三インターナショナル（コミンテルン）はたゞ徒らに各國の反感を買ひ、憎惡心をそゝるのみであつた。然らばスターリン擔當の東洋方面の〝赤化〟工作は如何。

レーニンの晩年、ジノウイエフ擔當の西洋革命は、上記の如く、大頓挫に會したが、スターリンの受持つ東洋方面は民族解放の點で相當な成績をあげた。即ちソ聯邦内の東洋民族は擧つてソヴエート政治の下におとなしく歸依し、文化と經濟二つながら、素晴らしい勢をもつて向上發展の途についた。他の一方ソ聯邦外にあつては、先づ近東と中東において、トルコ、ペルシア、アフガニスタン等々の被壓迫國が次から次へとその獨立を確立した。端的にいへば、その頃の第三インターナショナルの世界革命計畫は、ジノウイエフ擔當の、西洋に對する〃正面攻擊〃で蹉跌し、スターリンの受持つ〃東洋〃の〃背面攻擊〃において相當な成績をあげたといふことが出來よう。

二　東洋共産大學名譽總長

第三インターナショナルの民族政策は、レーニンが理論づけ、その實行をスターリンに一任したものである。スターリンが本文の記者に〃民族政策はレーニニズムの根本の一つである。われ等は二つの政策をレーニンに敎へてもらつたのである。余はレーニン先生の弟子である〃と語つた通りスターリンの民族政策は取りも直さずレーニンの民族政策そのまゝを繼承したものである。たゞ後記の如く、あとになつて、スターリン自ら、このレーニンから敎へられ、レーニンを繼承したところの民族政策をすつかり根底から覆へしてしまつたのであるが、しかも十月革命初年のレーニン、スターリン民族政策は、今日となつて、なほ且つ研究し、檢討する價値を失つてゐないと思ふ。

前記第三インターナショナル第二回會議の決議により、モスクワに東洋勞働共産大學なるものが創設され、スターリンがその名譽總長にあげられた。同大學はその後中國革命の最高潮に際して、〃孫逸仙大學〃と改名されたように記憶する。この大學は一九二五年五月十八日、恰度本文の記者のモスクワ滯在中のこと、名譽總長スターリンを迎へて、一場の訓示演說を聽いた。この演說はスターリンの當時の民族政策を、最も具體的に說明したもので、同政策を檢討するに當つて一讀を要するのである。スターリン曰く、

本大學は五十餘種族の東洋民族出身者を入れてゐる。その半はソヴエート聯邦内の東洋民族出身者であつて、他の半は東洋における殖民地及び屬領國から來たものである。前者においては已に勞働階級が帝國主義の壓迫を脫却し、自ら政權を握つてゐる。しかし後者にあつては今なほ資本主義が跋扈し、帝國主義が跳梁してゐる。この二つの全然相異つた狀態にある各民族の出身者を學生として入れてゐる本大學は勞ひ片足をソヴエート領内におき、他の片足を植民地や屬領國に踏み出し、二つの異つた使命の達成に向つて進まねばならない。即ちその一つはソヴエート聯邦内の東洋民族のために、共産黨の幹部を養成するにあつて、他の一つは、東洋の植民地及び屬領國のために、革命運動の指導者を養成するにある。

先づソヴエート聯邦内の東洋民族について所見を述べて見よう。彼等は他の東洋の植民地もしくは屬領國の東洋民族と比べて、左の諸點において異つた狀態にある。ソヴエート聯邦内の東洋

民族の諸共和國は、

第一、もはや帝國主義の羈絆をうけてゐない。

第二、資本主義の制度を脱却し、ソヴエート政權の治下にある。

第三、産業の發達は甚だしくおくれてゐるが、常にソヴエート聯邦の産業によつて援助され、これに倚頼し得る立場にある。

第四、强國の植民政策によつて壓迫されることなく、勞働階級の專制の保護下にあつて、ソヴエート聯邦の一つを形成してゐる。從つて常に聯邦の社會主義的建設に合同し得る立場にあり、また現に合同すべくつとめつゝある。

右の如き事情にあるから、ソヴエート聯邦内の東洋民族の指導者は、先づ左の使命を果さねばならぬ。

一、益々工業の發展をはかり、以て勞働階級を中心として、その周圍に農民を結合せしむる地盤を築くこと。(我等は、ソヴエート聯邦全體の經濟的發展につれ、東洋民族の諸共和國に於て、已に、その工業の發展援助策に着手した。これらの共和國は、みな豐富な天然富源をもつてゐるから、その工業の發展は將來頗る有望である)。

二、農業を改善し、特に、人口灌漑に力を入れること。(この事業も、既に着手され高加索及びトルキスタンでは、可成りの成績を擧げてゐる。)

三、多數農民の間に、消費及び生産組合組織の發達をはかること。(これは、東洋民族の經濟機關をソヴエート經濟組織の中に引入れる最良の方法である。)

四、各地のソヴエートと地方勞働民衆との接近をはかり、主として、土着民族の代表をして、ソヴエートを組織せしめ、以て、民族的ソヴエート國家の建設完成を期すること。

五、民族文化の發達をはかり、普通教育も職業及び技術的教育も、成る可くその民族の國語を以つて教へ、土着民族の中からソヴエート、共産黨、職業組合等の有力なる幹部を出さしめること。

翻つて、東洋における列强の植民地及び屬領國の現狀は如何と云ふに、彼等は先づ左の點において、ソヴエート聯邦内の東洋民族と異つた狀態にある。

第一、これ等の諸國は、今尚ほ帝國主義の羈絆下にある。

第二、内部(自國内の資産階級)及び外部(外國の帝國主義)の二重壓迫は、これ等諸國における民衆の革命氣分をして益々濃厚に醞釀せしめつゝある。

第三、これ等諸國の或る國、例へば、印度に於ては、資本主義が急激なる發達を遂げその結果土民間に多數のプロレタリヤ階級がおこりつゝある。

第四、革命運動の進展と共に、これ等諸國の資産階級は、革命派(小ブルジョア)と、妥協派(大ブルジョア)の二派に分れ、前者は革命闘爭に加擔し、後者は外國の帝國主義者と提携し、

これと妥協するを常とす。

第五、これ等の諸國では、一方、大ブルジョアが帝國主義との妥協提携をはかりつゝあるに當り、他の一方、これと併行して、勞働者と革命傾向の小ブルジョアとが相提携し「帝國主義からの完全なる解放」を目的とする反帝國主義の合同を構成しつゝある。

第六、これ等の諸國では、無產階級の間に、先づ自國の資產階級と帝國主義との妥協を打破し國民の大衆を兩者の壓迫から解放し、以て、自ら政權を握らんとする傾向が益々眞劍味を帶びて來つゝある。

第七、以上の現狀は、一方これ等諸國の民族解放運動と、他方西洋先進國のプロレタリア運動との間における相互の結束を容易ならしめ、且つこれを促進しつゝある。

右の事情から推して我等は少くとも左の三つの結論に歸着し得る。

一、東洋における列强の植民地及び屬領國は、國民革命の勝利によらずして、帝國主義の羈絆から解放され能はぬ。

二、東洋における列强の植民地及び屬領國中の資本的に發達せる國、たとへば印度の如き國にありては、その獨立は、(一)妥協主義の國內大ブルジョアを孤立せしめ、(二)急進傾向の小ブルジョアをして彼等の勞力から離脫せしめ、(三)勞働階級の進步的分子を結束して、獨立した政黨を組織することによつて、始めて之れが達成を期し得る。

三、東洋における列强の植民地及び屬領國の列强に對する國民革命の徹底的勝利は、その國の民族解放運動と、西洋先進國のプロレタリア運動との堅固なる結束なくしては到底不可能である

(拙著〝ソヴエート東方策〟より拔萃)

三　民族自決主義から發足

レーニン・スターリン民族政策は〝民族自決主義〟から出發してゐる。〝民族自決主義〟は歐洲大戰の終り頃、米國大統領ウイルソンがさかんに提唱したので、世人の中にはレーニンがウイルソンに、皷吹されたのでないかといふものもあつた。しかし〝民族自決主義〟はレーニンが歐洲第一次大戰前から夙に高唱し來つたもので、レーニニズムの最も重要な綱領の一つといはれてゐる。

即ち一九一三年、ロシア社會民主勞働黨（ボリシエヴイキーの前身）の幹部會議において、レーニンは堂々と〝民族自決主義〟の徹底を主張し〝各民族は自由にその本國から分離し勝手に獨立國を建設し得るもの〟とするとの決議案を提出した、然しかゝる極端なレーニンの〝民族自決主義〟には、黨內に多數の反對者があり、ブハーリンの如きは、

プロレタリア階級の自決主義には贊成だが民族の自決主義には反對だ……

といつて、烈しくレーニンに喰つてかゝつたものである。是等の反對論者は、かりにレーニンのいふ如き放膽極まる〝民族自決主義〟を多數の民族を包容してゐるロシアにおいて實行したならば、

ロシアは必然幾多の少數民族國に分裂し、歐亞に跨るその尨大な領土は、たちどころに瓦解してしまふであらうとなし、レーニンの提唱に容易に贊成しなかつた。しかるにレーニンは、

プロレタリアは常に大なる國家の建設を欲求する。プロレタリアは中世紀時代のバーチキュラリズムに反抗し、なるべく廣大な領土において、經濟的結合をはかり、資產階級との鬪爭をなるべく廣い範圍に展開するを利とする……されば民族の自決によつて、ロシアは決して瓦解しないむしろ却てその結束を固くするであらう。少數民族に對して寛弘な態度をもつて臨むは、却てロシアをして大ならしめる所以である……

となし、反對論者を說破してつひに、〃民族自決主義の徹底をもつて、黨是の一つとする〃決議案を無理押しに通過せしめた。この論爭に當つて、最も熱心にレーニンの所說を支持したのは、自ら少數民族出身であるスターリンであつたことはいふまでもない。

さて十月革命によつて、ロシアの政權を把握したレーニンは、先づスターリンを擧げて、民族人民委員に任じ、放膽無比のレーニン式〃民族自決主義〃の實行に當らしめた。

理論よりも實行を得意とするスターリン民族人民委員の采配下に、レーニンの民族自決主義はグン〳〵實行に移された。一九一九年から一九二〇年にかけて、國內の反革命動亂鎭定するや、先づ白ロシア、ウクライナ、アゼルバイジヤン、アルメニア及びジョルジア各民族は、ロシアから分離獨立して、民族共和國を創設し、對等の地位に立つて、ロシア社會主義ソヴエート共和國と勞農同

盟條約なるものを締結した。

その後更らに民族政策の徹底工作が進み、一九二二年十二月三十日、ロシア、ウクライナ、白ロシア及び後コーカサス（アゼルバイジヤン、アルメニア及びジョルジア各民族共和國は、同年十二月十三日、後コーカサス聯合共和國を組織した）の四大民族共和國が相倚つて一つの聯邦共和國を形成することに決し、こゝに現在のソヴエート聯邦が出來上つた。但しこの新設ソヴエート聯邦の規約（一九二二年十二月三十日の第一回聯邦會議の決議）の第六條に、

聯邦を組織する各共和國は隨時自由に聯邦から脫退することを得

としてある。しかし今日まで、この第六條による脫退權を行使した共和國は一つもない。聯邦は特に今度の大戰爭に際して、その結束の强靱さを示した。即ちレーニンとスターリンの〃分裂からより固き合同〃への政策は見事にその圖に當つた。最初レーニンの〃民族自決主義〃に反對したブハーリンやプレオブラジェンスキー等もあいたロが塞がらず、二人はその合著〃コンミュニズムのいろは〃に左の如く論じてゐる。

異種民族に分離獨立をゆるすは、可愛い兒に、火遊びの危險を戒めんとして、一度その手に火をつけるが如きもの。一度火の熱さを痛感した愛兒はもう再び火遊びをしない……と同樣、一旦分離獨立した各民族は獨立後の經濟、文化、國防等々における孤立の悲哀を感じて再びモスクワ政府の治下に集合し團結するであらう……

本文の記者が、スターリンを訪ねて親しく語つた一九二五年の頃は、國内におけるレーニン・スターリン民族政策の、最初の理想通りに發展した最高潮時であつたと思ふ。私はスターリンに、

ソヴエート政府は、聯邦内の東洋諸民族に自決權を與へ、ロシアから分離、獨立得手勝手となした結果、幾多の自治國、獨立國が雨後の筍の如く簇生した。しかし彼等はいつの間にか再び聯邦の組織の中へ戻つて來た。モスクワは周圍のすべてを引きつける力をもつてゐる……ソヴエート政府のこうした磁石のような怪力は何か？……。

と卒直な質問を出したところ、スターリンはニコリと微笑しながら、

帝政時代ツアリズムの汎スラヴ主義とその弱少民族に對する多年の壓制は、これ等の諸民族をして、舊政治を呪はしめ、その遠心運動をしてます〳〵強からしめた。彼等の心の奥底深くに、〝民族自決〟への憧憬が燃えてゐた。この時に當つて、われ等ボリシエヴイキーは、新生活を開拓し、人類みな平等なりとなし、人種の差別を同はず、互ひに尊敬し、相扶け合ふことゝした。こうした新らしい條件の下に、諸民族擧つて〝一緒の方がよい〟〝一緒に働らき度い〟といふ結論に到達する外無かつたのである。

と、いかにも得意そうに答へた。しかしそれは一九二五年頃のことである。その後いはゆる〝マルクエ〟やレーニンの聰明さを以てしても、豫見し得なかつた情勢の變化〟によつて、レーニズムの根本の一つであつて、レーニン先生から弟子スターリンが繼承したといふ民族政策もすつかり、舵

のとり替へで、全然別個の方向に向けられてしまつた。

四　民族リーダー一網打盡

本著の第十四章に詳述した如く〝第二次世界大戰避くべからず〟との見透しつくや、スターリンは急角度をもつて、ソヴエート巨舟の舵をとりかへた。〝廻れ右〟の號令一下、國際主義から國家主義へ急轉回が始まつた。民族政策の逆轉も、恰度その頃からスタートしたのである。強敵、たとへばドイツの如きを向ふに廻はして戰ふ場合、非常の奮發を必要とする。莫大なる犧牲を覺悟しなければならぬ。されば聯邦民族中の最大民族スラヴの奮起なくして、戰爭は遂行出來ない。こうした見地に立つたスターリンは、從來の少數民族優遇、多數民族抑壓を主眼としたレーニン・スターリン民族政策を棚におしあげ、昔の帝政時代そのまゝの大ロシア主義、汎スラヴ主義に逆戻りを始めた。同時に、少數民族に對して、ツアー政府以上の重壓を加へ出したのは餘儀なき必然であつた。兩者は楯の兩面の如きもの、二にして一つであるのである。果然新愛國主義、大ロシア主義、汎スラヴ主義の宣傳提唱と同時に少數民族に對し、ロシア語の使用を强制する、各民族共和國の共產黨支部の細胞組織とゲ・ペ・ウの觸手が動き出す、共和國や自治州政府閣僚の身邊が危くなる、民族優遇政策は俄然民族壓迫政策に變つて來た。壓迫の手は單に政治上のみに止らず、經濟方面にものびて來た。即ち統制經濟の名の下に、各民族共和國に、特殊農業を强制し、經濟關係の上で、

いやでもおうでも中央にたよらねば、立つて行けぬ羽目に陥し入れてしまつた。たとへばウクライナには甜菜と亜麻、トルキスタンには棉花、高加索には茶の栽培を嚴命した結果は如何。中央本土、もしくは西部シベリヤから穀物の供給を仰がなければ餓死する外はない。しかも糧道を絶つと絶たぬとはモスクワの方寸一つにある。歐洲の穀倉ウクライナに饑饉が起り、ウズベック農民が〝棉を喰へ〟とおどかされたのも、かうした少數民族壓迫を目的とする統制經濟の犠牲である。

最初クレムリンのこうした民族政策の急轉向が各民族共和國の指導者達に十分徹底してゐなかつたらしい。彼等は從來通りの方向を進み、少くとも民族の自治を何よりの標榜としてゐた。そこでそれとは氣付かぬうちにスターリンの新政策に逆行する、立ちおくれとなる、落伍者となる、最後にはゲ・ペ・ウの活動對照となる……といふようなことになつた。

一九三七年秋自殺した白ロシヤ共和國政府のチェルウヤコフ、ゴロヂェード、ウクライナ政府のスクルイプニック、リュブチェンコ、銃殺された高加索のエヌキーゼ、カラハン、三月公判の判決で、これまた銃殺されたウズベック、政府のホッヂャエフ、イクラーモフ、その頃ポリト・ビウロー（政治局）から引下され、入獄說を傳へられたウクライナ出身のチューバリ、コシオル等々はみな錚々たる領袖格のボリシエウイキーで、彼等は國際革命主義を信奉しながら鄉土愛着心が拔けきらず、かへつて共產主義標榜の一つたる民族自決主義に望みをかけ、ソヴエート治下にあつて各自民族の榮達幸福を期待し、クレムリン政治のために懸命の努力をつくして來たのである。然るにソ

ヴエート政治二十年にして、クレムリンの民族政策逆轉とともに、民族復興の希望も期待もすつかり外れてしまつた。こゝに民族意識が、階級意識を制したのであらう。各民族共和國政府の首腦、中央政府の要路にある少數民族出身者等は自ら分離獨立運動のリーダーとなり、やがて反スターリン陰謀に加はることとなつたらしい。皮肉なことには、スターリンの鄉里にも異變あり、高加索民族間の反中央熱燄烈を極め、一九三八年春、赤色軍士官數名、機密書類携帶のまゝ土耳古領に逃亡したなど、この方面の險惡さを物語るものが傳へられた。

然らば民族分離運動に對し、クレムリンは如何なる對策に出でたか、一方同運動の指導者に對しては嚴罰を以て臨むと同時に、他方大量移民を强制し、たとへばウクライナの農民は北氷洋岸と極東へ、カレリア民族はヤクーツク州へ、入れ代つて蒙古ブリヤート族は、あの歐州には見られぬ包（ペオ）をもつてウクライナにあらはれるといふ珍現象を呈することゝなつた。

然らばこうした政策急轉の結果、ソ聯の少數民族はどこへ行くか。民族運動は決して個々のリーダーに對するテロ、一部移民の强制位で、おさまるものではない。寧ろ壓制の加重とともにかへつて反撥的に深刻化する可能性がある。どうなることかと、クレムリンの方でも、また民族共和國の方でも、全然反對の立場から事態を憂慮してゐたところへ、今次の大戰が勃發した。戰時には民族運動など許さるべきでなく、すつかりゲ・ペ・ウの監視下に抑へられてしまつた。各少數民族は祖國を守るべく決然奮起した大ロシア民族のあとに、默つてついて行く外ないことゝなつた。蓋し戰

爭遂行のためには已むを得ないことであつただらう。

五　ドミトローフの登場

ジノウイエフ失脚の後、第三インターナショナルの二代目總裁となつたのがブハーリンである。ブハーリン總裁時代の第三インターナショナルは、主としてスターリンの指導下に、中國革命に力を集中した。スターリンとブハーリンの中國革命援助と指導は次章において詳記する。ブハーリンはその後間もなく右翼派彈壓で失脚し、ついで更に右翼トロツキスト事件に連坐して銃殺された。ブハーリンに代り、第三インターナショナルの三代目總裁として登場したのが、容貌魁偉のブルガリア共産黨首領ドミトローフである。第三インターナショナルは、各國共産黨代表によつて組織されてゐるのであるから、その總裁は、いつもソ聯共産黨代表でなければならぬといふ理由はない。當時ドミトローフは、ベルリンにおける議事堂燒打事件で法廷に引出されたが、法廷においてナチの裁判官に敢然喰つてかゝり、大いに男振りをあげた。またそうした強いところをスターリンに買はれたのであらう。その直後モスクワに招かれ、ブハーリンの後を襲いで、第三インターナショナルの總裁となつた。しかし彼の總裁は最初から〝床の上の飾物〟の觀があつて、實際の仕事は、事務總長マヌイリスキーが切つて廻はしてゐたようである。

ドミトローフの登場は恰度、ソ聯がスターリンの〝廻れ右〟の號令下に、國際主義から國家主義

へ急轉廻を始めた時にぶつかつた。從つて第三インターナショナルの活動は、甚だしく制肘を加へられ一時あれほど世界を騒がせた〝世界革命の參謀本部〟もすつかり〝開店休業〟のかたちとなつた。否、休業どころか獨ソ開戰後一九四三年五月十五日、あつさり赤旗をおろし、店を閉ぢてしまつた。第三インターナショナルはもう御用濟みである。戰時こうした機關は、無用の長物であるといふのか、解消の理由であつた。それは例によつてリアリスト共産主義の冷徹さから割り出されたに過ぎない。たゞしかし各國共産黨の首領達が、何の不平も訴へず、おとなしくスターリンの命ずるまゝに、第三インターナショナル解消の宣言に署名したことは、各國の共産黨員をして少からず失望させたことであらう。

しかし彼等の失望はホンの一時のことであつた。今次の大戰がソ聯の勝利に終ると同時に曾ての第三インターナショナルの幹部各國共産黨の首領達は、脚光を帶びて、舞臺面にあらはれた。ドミトローフはブルガリア政府の首相となり、ゴーツワルトはベーネシュに代つて、チエコの大統領となつた。トーレーズはパリに歸つて、フランス政界に重きをなしてゐる。たゞドローレス女史は依然フランコのスペインにいれられず、イタリーのトリアッチは一九四八年六月ローマで刺客の手に傷いた。しかしその他の各國共産黨首領はみな得意の境地にある。

第二十章　中國革命の指導

一　ブハーリン躍る

レーニンの病臥、引きつゞいてその死去の頃〝レーニンの後繼者〟を目指しての競爭で、クレムリンの巨頭連は一時第三インターナショナル＝コミンテルンのことを忘れてゐたかの觀がある。殊にその總裁のジノウイエフが、競爭者の一人として登場し、且つ相手のトロツキーに一大痛棒を喰はされるといふ騒ぎで〝世界革命の參謀總長〟としての役目は、御留守のかたちとなつた。またその頃、歐洲の革命運動は、戰後〝資本主義の安定〟によつて、各國とも押され氣味で振はなかつたやがて〝三頭組〟崩壞し、ジノウイエフの勢力失墜するや、彼の擔當して來た西洋方面が、大體において〝守勢〟に轉じ、スターリンの受持つ東洋方面に、重點がおかれるようになつたのは、必然の成行であつた。

東洋方面におけるソ聯の政策は、近東及び中東方面において、半ば成功し、半ば失敗に終つた。即ちトルコやイランの〝列國の羈絆〟からの解放獨立は成功したが、更らに竿頭一歩を進めて、これ等の國をソヴエート化しようとした時、各國の國家主義と保守勢力の頑强なる抵

抗にぶつつかり、大頓挫を來たした。

そこでソヴエート政府もコミンテルンも、當時已に政權を完全に把握したスターリンの指導の下に〝赤い手〟を遠く極東にのばし、蒙古、中國、朝鮮の工作に乘り出すことゝなつた。

合同本部が切崩されて以來ジノウイエフはいよ〳〵完全に勢力を失つた。そこでコミンテルン總裁の椅子は、ブハーリンの占むるところとなつた。然しコミンテルン總裁としてのブハーリンは要するにスターリン黨書記長の吹ける笛によつて、踊つたに過ぎない。但し彼は大いに踊つた。

スターリンがいよ〳〵その東方政策の重點を中國におき、眞劍に力瘤を入れて、中國の革命に臨んだのは、私の觀るところ、一九二五年の上海における五四事件以後のことであると思ふ。

五四事件における上海勞働者の結束と奮鬪振りは、そうし企事にかけては何人にも讓らぬボリシエヴイキーでさへ驚ろいたほど、すさまじいものであつた。それまで、いづれかといへば、クレムリンは中國人は概して個人主義である。團結と犧牲心に乏しい、殊に中國勞働者はまだ階級意識に目ざめてゐないとなしてゐたようである。然るに五四事件において、上海の勞働者は目ざましい働らきを見せた。この事件を契機としてスターリンは從來の控え目な觀測を一擲し、中國の勞働運動共產運動に對して、多大の望を嘱し、從つてまた大いに力瘤を入れ出したわけである。

しかしその頃まだ第三インターナショナルはジノウイエフが總裁であつた。彼は元來〝西洋革命先行論者〟であつて、最初から東洋の革命には一向興味をもたず、また從つて重きをおかなかつた

一九二五年秋の第三インターナショナルの大會において、ジノウイエフ總裁は〝中國の革命〟を、〝モロッコの叛亂〟と對照した。まことに〝象に比するに小兎〟を以てしたもの、認識不足もまた甚だしといはねばならぬ。しかしその後間もなく第三インターナショナルは〝西守東進論〟のスターリンとブハーリンの手に移つた。

一九二五年から一九二六年にかけてのスターリンの中國革命に對する力の入れ方はたいしたものであつた。廣東には蔣介石の惟幄裡に軍事顧問としてガーレン（有名なブリウヘル將軍）政治顧問としてボロヂンあり、北京にはカラハン大使があつて、役者が揃つてゐた。廣東の黄埔軍官學校は主としてソ聯の支援によつて創設されたものであるといはれ、また武器や軍費の補給等にも、相當な援助が與へられたらしい。果然、一九二六年春早々蔣介石の指揮下に國民革命軍は北方に向つて行動をおこした。北伐途上連戰連勝、やがて武漢三鎮落ち、蔣介石軍は長江を下つて、南京、上海に迫る……といふ素晴らしい勢ひを示した。

二　十二月決議

一九二六年十一月二十二日、モスクワはクレムリン本宮アンドレイの大廣間において第三インターナショナル第七次擴大幹部大會が開かれた。議長席についたブハーリンは開會の辯において、

われ等は偉大なる解放革命の戰鬪に當りつゝある中國國民に敬意を表する。われ等は全共產イ

ンターナショナルの名において、また全世界の勞働階級の名において、あらゆる力をもつて、中國々民の世界的にして、また歷史的の戰鬪を援助すべきことをこゝに誓約する。

と述べて、萬雷の如き拍手喝采を受けた。翌二十三日議事日程に入つて、ブハーリンはその三時間にわたる〝國際政局と第三インターナショナルの使命〟と題する幹部代表の口頭報告において、先づ中國問題に言及し、

中國におけるわれ等當面の事業は帝國主義を打破するにある。中國の革命はこの點において、已に大なる成功をなし遂げた。廣東軍は長江に進出し、馮玉祥軍また、北京を睥睨せんとしてゐる。但しこれは單に中國當面の形勢に過ぎない。更らにそのさきの將來に對して、如何に策すべきか。第三インターナショナルの中國に對する最大の使命は、中國とソヴエート聯邦及び西歐プロレタリアの同盟を形成して、以て中國の非資本主義的發達を可能ならしめることにある。この使命は至難なる事業である。しかしわれ等はこの使命を果し得るであらう。

と說き更にその〝資本主義の安定とプロレタリヤ革命〟と題する長文の筆記報告において、再びこの說をくりかへし、左の如く論じた。

中國の前途には二つの全く方向を異にした道がある。一つは外國のブルヂョアと妥協し、その武力もしくは經濟的支配下に屈服する道であつて、他の一つはプロレタリヤの獨裁（ソヴエート聯邦を指す）及び西歐プロレタリヤと同盟し彼等をして列國の對支壓迫を牽制せしめる道である

中國にして、前者をとらんか。必然資本主義的發達の道に向ひ、利益の大部分は外國資本のために壟斷され、多數人民は益々貧困に陷るであらう。しかし、もし中國にして後者をとり、全世界の勞働者の援助によつて、獨立した經濟建設にあたらんか、當然社會主義的發達の道に向ふであらう。第三インターナショナルは革命の中國を誘つてこの道に導くべく努力しなければならぬ。

十一月卅日から十二月二日にかけ、中國問題の討論が續けられた。討論の後委員會附託となり、同委員會で起草された決議案が十二月十六日の本會議を通過した。この決議文こそ、第三インターナショナルの中國革命に對する大方針を最も具體的に決定したもので、中ソ關係及び國際革命史上重要な資料たるを失はない。

一九二七年春、張作霖が北京のソヴエート大使館を手入した際、この決議文を發見して、恰かも鬼の首でもとつたかのように狂喜し〝スターリンの中國赤化陰謀發覺！〟などと觸れ廻つたものであるが、しかしこの決議文は秘密でも何でもなく、その主要部分は當時モスクワ新聞紙上に掲載された。

第七次擴大會議の當時は恰かも南支革命の最高潮時であつた。從つて大會の空氣は、中國革命樂觀……といふよりは、むしろ有頂天になつてゐたかの觀がある。

決議文の中にも〝中國革命の勝利は、世界の資本主義にとつて手痛い打擊である。されば帝國主義の列强は、あらゆる方法をもつて、中國革命の彈壓につとめるであらう〟〝張作霖、吳佩孚、孫

傳芳等々の反動軍閥は依然帝國主義の援助の下にあるも、もはや革命防止の力としてたのむに足らぬと見られてゐる〟といつたような文句が並べてあり、一九二六年末スターリンもブハーリンも、中國の大勢已に革命の勝利に決したものと見てゐたらしい。然るに歲を越えて、一九二七年に入るや、中國革命は急轉直下、形勢逆轉して、十二月決議は、早くも五月決議で、そして更らにまた七月決議でやり直さねばならぬことゝなつた。

蔣介石の北伐軍は一九二六年夏から秋にかけて、廣東から長江まで、連戰連勝、向ふところ敵なしの慨があつた。然るに一九二七年に入つて、國民黨內右派と左派及び共產黨との間に內訌が始まつた。

由來國民黨と共產黨とは、到底いつまでも一致して行けるものでない。あわせものははなれるにきまつてゐる。特に北伐軍は、共產黨から見て、最初から危險な存在であつた。革命軍の將領の中には、共產主義と何等の交涉のないものが多い。一時左翼を裝ふても〝赤大根〟である。いつ何時豹變するかわからぬ。この點について最も深く憂慮してゐたのがスターリンで、彼は前記第三インターナショナル第七次擴大幹部大會において、中國革命參加の軍隊內の政治工作の急務を說き、左の演說を試みた。

中國共產黨は先づ革命軍內部において、政治運動に力を入れ、革命軍をして眞に〝中國革命の理想の旗手〟たらしめなければならぬ。殊にこれを急務とする所以は、近頃益々多くの舊式武將

が續々革命軍に加はりつゝあることである。彼等は徒らに革命軍の士氣を頽廢させるのみである
彼等を〝中立〟せしめ、もしくは轉じて國民黨員とたすには、軍隊内部において、不斷の政治運
動を行ひ、彼等に對し、監視を完全にすることを以て、最も肝腎とする。これを怠るならば、革
命軍はやがて最難難の苦境に陷るであらう。第二に中國革命黨員、特に共産黨員の心すべきこと
は、自ら軍事の研究に當ることである。彼等は軍事を以て第二位の事業と見てはならぬ。中國に
あつては、軍事は革命における最重大事である。彼等は今から自ら軍事を研究し、以て逐次、革
命軍内における指導的地位を占めなければならぬ。かくしてこそ、中國革命軍は始めてその目的
に向つて眞直ぐ進むであらう。然らざれば、軍隊は徒らに紛擾動搖をくり返すのみであらう。
かく論じたスターリンも國共合作方針を主張した。中國共産黨は創立日なほ淺く獨立して事をな
すべく、餘りに小いさい。それ故出來るだけ、國民黨と協力して行くべきである。その肚の底は如
何にあつたにせよ少くとも共同の敵北方軍閥を打倒するまでは、國共合作で行かうといふことであ
つたらしい。

然るに共同の敵のまだ倒れぬ中に、南京進出の頃から、兩派の内訌はいよ〳〵深刻を加へ、上海
に來て遂に爆發を見ることゝなつた。

一九二七年三月末、蔣介石は長江下流に、勢力をのべたが、上海では總工會側の反抗運動猛烈を
極め、手もつけられぬ狀態に陷り、加うるに汪兆銘を首領とする國民黨左派と中國共産黨の手にあ

つた武漢政府の反蔣態度がいよ〳〵険悪となつて來た。

戰爭に勝つた蔣介石は政治的に八方塞りとなつた。この時、國民黨の長老葵元培、吳稚暉、胡漢
民等が上海に來り、難局打開の方途はたゞ反共反ソの新旗幟をあげて、上海の資本家及び列國の同
情をひく外ないと勸告した。窮餘の揚句、蔣介石は同年四月十二日、上海クーデターを敢行し、目
ぼしい總工會の巨頭に向つて一大鐵槌を下した。四月二十日南京において新政府を樹立した。

かくして中國革命は、共産黨から見て、またソ聯から、第三インターナショナルから見て、最後
の大詰めで、大頓挫を來たした。まさに九仞の功を一簣に缺いた。モスクワでは第三インターナシ
ョナルは五月に第二回、更にまた七月に第三回擴大大會を開いて、中國對策を議したが、兩次の大
會とも、十二月の第一次大會とは打つて變つた沈痛な空氣に滿ちた。何しろトロツキー派の攻擊も
の凄く、ブハーリン防戰これつとめたが、しかし七月決議には、はつきり、

蔣介石のクーデター以來、ブルヂョアは革命を裏切り、敵側に寢返つた。革命は部分的に敗北
した。

といひ、中國革命慘敗の事實を認めた。しかしこれをもつて直ちに中國の共産革命は、トロツキス
トのいふ如く、あたまつから、全然失敗に終つたとなすはどうか？。　本文の記者はその頃中國にあ
つて、五年間の長きにわたり、スターリンの對中國政策を凝視してゐた。私は北京で出版した〝ソ
ヴエート東方策〟〝レーニンのロシアと孫文の支那〟の兩著において、スターリンの對中國政策の

遠大性、執拗性を說き、捲土重來の秋來るべしとの豫測を下した。中國革命慘敗の直後、スターリンは、

中國革命は全敗に終つたと見るべきか。否、中國革命の失敗は一時的に過ぎない。ただ問題は失敗の程度如何にある。その手傷の深さ如何にある。或は一九〇五年のロシア革命に比すべく、その捲土重來に十數年を要するであらうか。否、中國革命今次の失敗は、むしろ一九一七年のロシア革命における七月政變と對照すべきより多くの可能性をもつてゐる。二ケ月といはずとも、半年もしくは一年後に新らしい革命の勃發を見るやも知れぬ。その時こそ中國革命はいよ〳〵勞農ソヴェートの建設を旗印とする時であらう……

と論じ、中國における捲土重來の日は半年後、一年後に早くも到來するであらうとの豫測を下したが、中國共產黨はそう早くは再起出來なかつた。

三　スターリンと蔣介石

蔣介石の上海クーデターは中國共產黨にとつて大なる打擊であつたことはいふまでもない。そして國民黨と緣を切つてから、中國共產黨は急に小いさなものとなつた。しかしその後陰忍持久捲土重來をはかつた方策はどうであるか。中國共產黨の實力はその軍隊にある。中共軍にある。一時河南の山間にかくれてゐた。中共軍は、蔣軍の間隙に乘じて、北方に移動し、陝西省の延安にあらは

れた。爾來そこを根據地として軍の增强をはかり黨の勢力擴張に邁進した。一九三七年日華事變始まるや、中國共產黨は再び國民黨と提携し、日本に對して共同戰線を張ることゝなつた。同時にその勢力は俄かに膨脹し、急激に增大した。それにつけても、本文の記者の長い年月にわたつて、興味を禁じ得ないのは、國民黨の黨首蔣介石と、中國共產黨の支持者であるスターリンとの〝奇しき宿命關係〟である。民國十八年蔣介石が廣東から國民革命軍を率ゐて北伐の途に上り、長驅武漢を攻略し、一氣呵成中原進出に成功したについては、スターリンの助力與つて大なるものがあつた。當時蔣の惟幄にはボロヂン、ブリウヘル等が參劃した。そしてクレムリンから遙かに援蔣政策の元締に當つたのが、黨書記長スターリンとコミンテルン總裁ブハーリンであつた。蔣介石はその北伐成功、中原進出についてスターリンに負ふところ甚大であつたのである。

しかるに國民革命軍一度長江を下つて、南京を乘取り、上海に進出するや、彼は俄然鉾を逆さまにして、上海クーデターを敢行した。ソ聯との斷交、共產黨の排擊を宣明して、ボロヂンを捕へ、ガーレンを逐ふた。まことに百八十度の豹變振りであつた。その頃恰かもソ聯では、スターリン對トロツキー爭覇戰の眞最中であつた。トロツキー派の中國革命指導失敗に對する攻擊は、スターリンにとつて、相當大きな打擊であつた。裏切られ、おまけにトロツキストのために叩かれたスターリンの蔣介石に對する感情は當時深刻を極めたやうである。

しかしスターリンは冷徹そのものゝリアリスト共產主義者である。感情でもの事を處理するには

あまりにも冷靜であり、リアリストである。一度日華事變勃發するや、スターリンと蔣介石は感情を捨てゝ手を握り日本の出兵直後、中ソ不可侵條約を締結した。中國共產黨は前記の如く、國民黨の〝敵から味方〟に早變りし、中共軍は蔣軍と肩を並べて抗日戰線に立つた。日本が敗れると兩者は又敵となり毛澤東が蔣介石の喉頸をしめつけてゐる現狀である。

このやうにスターリンと蔣介石は、警戒しつゝ助け合ひ、助合ひつゝ警戒し合つてゐる。まことに妙な宿命關係である。しかも二人は色々な點で相似てゐるといふこともまた本文の記者が長い間ス、蔣兩者において興味の一つとなして來たところである。

私は一九二五年スターリンとモスクワで、一九二七年張群の紹介で蔣介石と北京の外交大樓で親しく會つて語つた。二人は色々な點で、私に同じような印象を與へた。二人とも極めて丁寧な應接振りであつた。スターリンは〝病氣で、貴下のモスクワ出發を延ばさせて濟まなかつた〟と云ひ蔣介石も、また〝貴下の御高見は紙上拜見してゐる〟といひ、二人とも獨裁官としては、丁寧過ぎる挨拶であつた。また二人ともニコ〳〵顏で、低いやさしい聲でものをいふ。少しも氣取つたり、虛勢を張つたりするようなことはない。

蔣介石は浙江なまりの露骨な中國語をつかひ、スターリンはジョルジアのアクセントむき出しのロシア語をつかふ。二人とも雄辯家といふほどのことなく、どちらかといへば、口舌よりも腕つ節即ち不言實行主義である。

欠

第二十二章　戰爭指導

一　戰時內閣

獨ソ開戰の日、スターリンは二つの重大措置を行つた。一つは、三方面司令官の任命で、今一つは戰時內閣の組織である。北部方面軍司令官にウオロシーロフ、西部方面軍司令官にチモシェンコ南部方面軍司令官にブデョンヌイ三元帥を任命した。三人とも揃つて往年のツアリツイン組である。トハチエフスキー事件後の赤色軍は、トロツキー系一掃とともにツアリツイン一色で塗りつぶされたのであるから、この任命はやむを得なかつたのであらう。しかしツアリツイン兵團はパルチザンの集合であつた。その首領のウオロシーロフは炭坑夫上り、ブデョンヌイとチモシェンコは帝政軍の下士出身である。パルチザン戰法は現代科學戰に向くはずもない。開戰劈頭この重大任命は決して成功であつたとはいえない。しかし後記の如く、スターリンはあとでこの失策をあざやかな手際で、立派に是正した。

戰時內閣の正確な名稱は、國家防衛委員會といふのであつた。委員長がスターリン、副委員長がモーロトフ、委員はウオロシーロフ元帥、マレンコフ、ベリアの三人であつた。あとでカガノウイ

欠

ッチとウオズネセンスキーの二人が加へられ、戰時內閣は七巨頭で構成することゝなつた。このソ聯戰時內閣の顏觸れを見て、奇異の感を與へたのは、七人のうち、二人までがジョルジア人（スターリンとベリア）ユダヤ人が一人、即ち少數民族出身者が半數を占め、ロシア人が三人（モーロトフ、ウオロシーロフ、マレンコフ）しか入らなかつたことである。ウオズネセンスキーの出身民族はつきりしない。大ロシア主義に轉向したスターリンの人事としては、少々矛盾があるように思はれるが、しかしモーロトフはあらゆる場合のスターリンの〝次官〟であり〝代理〟〝副〟である。ウオロシーロフは、地位は高くても、近年やゝもすれば〝床の間の飾り物〟の觀があり、マンコフはスターリンの秘書格である。ベリアとウオズネセンスキーの入閣は前者がゲ・ペ・ウ長官、後者が國家計劃局長として管掌事務の必要からであつたらう。そしてカガノウイッチはいはゆる〝獨裁官の智慧袋〟として、追加入閣を命ぜられたのであらう。かくして七人から成る戰時內閣とはいつても、實質においてはスターリン一人の戰時獨裁機關に外ならぬ。ウオロシーロフが軍事、ベリアが警察、ウオズネセンスキーが經濟各擔當方面の報告をなし、それによつてスターリン委員長が裁決を下し、指令を發する。マレンコフが事務的方面を擔當したものと見て當らずとも遠くはなかつたと思ふ。

二　トハチエフスキー作戰

獨ソ戰爭當初において、スターリンに二つの大きな誤算があつた。一つはヒットラーはまだまだソ聯に對し鉾を向けまいと見てその開戰の期日をあやまつた。今一つは獨軍の攻擊正面はウクライナにあるとしたことであつた。しかしその後の戰爭指導に當り、スターリンは大體善斷善處した……といふことは前項にも書いた通りである。開戰後スターリンのとつた措置の中で、最も大きな善處であつたとしなければならぬことは、これまた前記の如く、スターリン自ら全國民に向つて〝祖國危ふし〟と訴へ、今度の戰爭に〝第二次祖國戰爭〟の名稱をつけ、國民の愛國精神を鼓舞したことである。次にもう一つスターリンは重大なる決斷を下した。それは第一夏の陣においてトハチエフスキー作戰をとりあげたことである。

獨ソ戰爭の初頭獨軍進擊の鉾先もの凄く鋭く、ソ聯軍は全線にわたつて慘敗した。クレムリンの軍議において、第一次祖國戰爭におけるが如く、第二次祖國戰爭においても、〝クツーゾフ作戰〟をとるべし、即ち〝退いて守れ〟と主張したものが少くなかつたといふ。さもあるべきこととしなければならぬ。然るにスターリンは斷乎〝クツーゾフ作戰〟を排して〝トハチエフスキー作戰〟を取り上げた。

然らばトハチエフスキー作戰とは如何。大膽なる積極防禦作戰、即ち〝進んで守る〟こそ、それ

であつたのである。更にこれを具體的にいふならば、その緒戰において、第一、竿頭一歩を進め、先づ敵地に入つて敵を撃ち、これに破れた場合、第二、國内に退く。しかしあくまで頑强に抵抗を續け、第三〝縱深戰術〟によつて、敵の前進を阻止し〝ウェルダン戰術〟によつて、敵の戰力消耗をはかる。そして〝縱深戰術〟は、ソ聯の地理的條件、即ちその廣大な面積と距離とを利用し〝ウエルダン戰術〟は、スラヴ民族の鈍感性と粘り力を考慮に入れたものである。かうした積極防禦作戰は、トハチエフスキーが、軍司令官として、參謀總長として、はたまた國防人民委員代理として特に戰略戰術委員長として、赤軍の要職にあること二十年の間に、研鑽に研鑽を重ね、練りに練つて、創案したものである。トハチエフスキーは、初代陸海軍人民委員トロツキーの下に、この大業に着手し、三代目國防人民委員ウオロシーロフの時代に、これを完成し、そしてこれを五代目國防人民委員スターリン首相に遺したのである。

もしトロツキーの初代陸海軍人民委員としての最大の功績が、かれが幾萬かの帝制露軍將校の中から、一人の若き戰略家トハチエフスキーを見出したことにあつたとするならば、スターリンの戰時國防人民委員としてのそれは、まさにトハチエフスキーを銃殺に處しながらも、その作戰計畫を繼承し、對獨作戰に、これを大いに適用したことにあるとしなければならぬ。少くとも獨ソ戰第一次夏の陣におけるソ聯軍の作戰は、徹頭徹尾トハチエフスキー戰略その儘の踏襲であつたといふことが出來ると思ふ。

三　敵地に敵を撃つ

開戰の數年前、ソ聯の國防人民委員ウオロシーロフは〝赤軍は敵が攻擊をおこした地において、敵を邀擊する〟といふ意味深長な聲明を公表し、内外の耳目をそばだたさせた。つひその直前までソ聯では〝わが領土の一塊も他國に讓らぬと同時に、われ等は外國の領土の寸地をも欲しない〟といふ有名な〝スターリン標語〟が最も廣く宣傳され、それがまたソ聯の對外政策の基調をなしてゐた。然るに今突如として、敵が攻擊を起した地、即ち敵地において敵を撃つべしといふ。そのためには先づ敵地に一歩踏み出すことが、前提でなければならぬ。しかしてそれは當然右の〝スターリン標語〟に反對することになるのであり、ウオロシーロフの聲明を聞いて、世界が驚きの目を見はつたのは、當然のことであつた。但し、ウオロシーロフのかうした放膽な發言は、勿論決して〝スターリン標語〟にたてつかうとしたものでもなければ、またかれ自身の單なる景氣付け的豪語でもなく、實は、次官トハチエフスキーの〝積極防禦作戰〟方針から出たものと見なければならぬ。果してその後間もなくスターリン自ら、トハチエフスキー作戰を容れたか、昨日まで八釜しく宣傳し來つた對外不侵略の標語を、今日は綺麗さつぱりとひつこめてしまつた。

今次歐洲第二次大戰勃發するや、ソ聯は矢繼早やに、手をのばし、ポーランドの東半、カレリヤ地峽、バルト三國、そしてベッサラビヤ、ブコウイナ等々舊帝政露領を奪還し、强引的に領土の大

擴張を決行した。やがて新國境に、第二スターリン線の構築に着手し、またベーロストック、プレスト・リトウフスク、ウイボルグ、リガ、ルノック、レンベルグ等新附領土内の要地要地に大兵を集結した。それは畢竟トハチエフスキーの遺策〝敵地において敵を撃つ〟の方針により、先づ西方隣接國に一歩乗り出し、對獨開戦の場合、新附の領土をもつて、戦場にあてようとしたものと見なければならぬ。

しかしソ聯軍は緒戦において、虚を衝かれ、不意を討たれて敗退し〝敵地に敵を撃ち〟損じた。新附の領土は、さつさと引揚げてしまつた。舊國境の要衝ミンスクさへ敵手に渡すことゝなつた。けれどもソ聯の領土は廣大である。トハチエフスキーの〝進んで守る〟作戦は出鼻を挫かれたかたちとなつたが、なほ且つ〝縱深戦術〟を用ゐる餘地が十分のこされてゐる。スターリン線を中堅とするドウイナ河、ベレヂナ河、ドニエストル河の流域は、この戦術利用の好適地である。スターリンは前線部隊に〝一木一石にも嚙りついて死守せよ〟との厳命を下した。獨軍は猛攻猛進を續けたしかしその途上一歩進む毎に少からぬ損害を蒙つた。

こうしたトハチエフスキー作戦はいふまでもなく、往昔ボルタワまで退いて、チャールス十二世と雌雄を決したピョートル大帝や、モスクワを焼き拂つてナポレオン軍の潰滅をはかつたクツーゾフとは、全然反對の方向を行くものである。然らばスターリンは何故露軍の〝退いて守る〟傳統をかなぐりすてゝ〝進んで守る〟トハチエフスキーの積極防禦方針をとつたか。蓋し、ピョートール大

帝やクツーゾフ時代と、今回の對獨戦争との間には、大きな本質的相違がある。十九世紀の前年までも、ロシアは工業的に殆んど開發されず主として農業國であつた。從つてその領土の一部を喪失しで、ロシア軍隊の戦力には、たいした影響はなかつた。しかし今日はいはゆる戦車や、飛行機等が極度に進歩した装備の戦争時代である。科學の戦争、工業の戦争時代である。ソ聯の工業の大部分は、西部露領に偏在してゐる。西部の領土を退却するといふことは、今日はもう決して單なる都市や村落の喪失でなく、戦力の根源をなす工業地帶を敵手に委ねることを意味する。こゝにおいてソ聯としては何を措いても、工業中樞地を保持しなければならぬ。そのためには先づ戦線を出來るだけ、ソ聯の西邊において固守することを絶對必要とする。否、出來得べくば、一歩敵地に踏み出し、前記の如くポーランドやバルト三國、ベッサラビア等々で戦はうとしたのである。

四　ウクライナからウラルへ

モスクワとレニングラードは最初からあくまで死守する方針であり、またこの方針を貫徹した。たゞ廣大なウクライナを守り通すことは至難である。ウクライナは敗退を餘儀なくされる場合があらう（果してウオルガ河まで退却した）といふ豫想の下に、ソヴエート政府はずつと前にドンバス一帶の工場をいざといふ場合、いつでもウラルへ移す用意をしてゐた。ウクライナの工場をウラルへ移す……といふことは至難の事業である。しかしこの至難な事業をスターリンはまことに見事に

やつてのけた。

ソヴエート政府はかねて對獨戰爭の場合、直ちにウクライナが戰場となり、この方面の工業に依賴することの不可能なることを考慮し、五ケ年計畫の遂行に當り、ウラルにおいて、第二工業根據地の建設を畫策した。スウエルドロープスク、チエリヤビンスク、マグニット・ゴールスク等々ウラル山間の要地要地に、工場が設計され、思ひ切つて大規模な鐵骨バラックが打ち建てられた。しかし不思議なことには、こうしたバラックの中に、機械五台据えつけられるところに、二台か三台しか据えつけられてゐない。あと二、三台の場所があけられたまゝになつてゐる。當時世間では、これ五ケ年計畫が半ば失敗したからである。外國に註文した機械が着かなかつたからであらう……といはれたものであるが、實はそこにいざといふ場合ウクライナの工場を受け入れる重大秘策があつたのである。獨ソ開戰となるや、鐵道車輛をあるだけウクライナに集結し、ドシ〳〵機械を運び出す、ウラルへ搬入する、バラックの中のあいたところへ機械を据えつける、スターリンはこうした工場の移轉に驚ろくべき辣腕を揮つた。獨軍の方ではウクライナの全土を失つたソ聯は、戰車や飛行機の生産半減したことゝして、相手の戰力を、低く見てかゝつた。すると、驚ろくべし、第二次冬の陣から、ソ聯軍は極めて豐富な裝備をもつて反攻逆襲に轉じて來た。

五　ソ聯式愛國心

ソ聯軍はその退却に當つて上記の如く工場、機械、資材等搬出できるものは悉く搬出し、あとは徹底的焦土戰術で燒いてしまつた。

焦土戰術はスターリン自らその演說、その放送において、くり返し奬勵したところで、彼の戰爭指導の要點の一つであつた。

スターリンは今次の對獨戰爭に當り、後記の如く時にトハチエフスキー作戰（第一次夏の陣における頑强抵抗）をとり、時にクツーゾフ作戰（第二次夏の陣におけるドンバスと、北コーカサス退却）に出で、大いに戰術の變化振りを發揮したが、戰爭の全局を通じて、焦土戰術だけは終始一貫クツーゾフの〝モスクワ燒拂〟に學んで隨所に徹底的破壞を決行した。

由來ロシア人は大國民である。大マカな民族であるだけに、時々桁外れ、度外れ、そしてあらゆる打算を超越したことを、平氣でやつてのける。この性癖のあらはれの一つが、ロシア式焦土戰術である。一八一二年の冬の〝クツーゾフのモスクワ燒拂〟はロシア式焦土戰術の好模範といつてよからう。立派な首都を一夜にして灰燼にしてしまつた。今度の對獨戰における焦土戰術もこうした桁外れ度外れのものであつた。しかもそうした焦土戰術は、一八一二年にはクツーゾフの命令によつた如く、一九四一、二年には、スターリンの嚴命によつたものである。

スターリンが始めて焦土戰術を呼號したのは、一九四一年七月二日の演說で、その後も屢々放送に、演說に、軍令に、パルチザンの活躍と同時に、焦土戰術の徹底をさかんに奬勵した。また「ソ聯最高會議々長カリーニンをして「プラウダ紙」に「ソ聯式愛國心とは何ぞや」といふ。論文を寄書させた。同論文に曰く、

敵が進攻して來た場合、價値のある一切のものを破壞しなければならぬ。これらのものは我々が血と汗とをもつて創り出した貴いものであるといふ考へに囚はれてはならぬ。現在の如き危局にあつては、惜しんだり、悔やんだりする餘裕は全然ない。すべてのものを破壞すること、敵の手に何ものをも殘さぬこと、それが眞の愛國心である……

こうした度外れの焦土戰術の奬勵によつてスターリンは何を期待したか。敵の戰力を少しでも增大させまいといふのが、その主要なる目的であつたことはいふまでもないが、同時にまた對獨敵愾心、復讐心を刺戟しようといふこともその狙ひどころの一つであつたらしい。焦土戰術、パルチザン悲劇等すべて敵に占領された地方の出來事は、すべて敵の侵略の結果だ、敵のために、かような始末となつたのだ……といふ宣傳を併行させ、以て對獨敵愾心をいやが上にも激昂させようとしたのでこうした宣傳にはいつもスターリンは力を入れるのである。そして三年間の戰爭中、すつかりソ聯國民をあげてドイツを仇敵にしてしまつた。

六　パルチザンの讃美

從來露軍を敵として戰つたもの、ナポレオンを始めとして最も懸念したことは、相手が戰はずして、ぱた〳〵逃げてしまひはせぬかといふことであつた。露軍が少しも戰力を消耗せずに、さつさと退却してしまふと、これに對して殲滅作戰の手の打ちようがなくなる。露軍側には「距離」と「時間」の二つの味方がある。領土が廣大であるから、どこまでも逃げおふせることが出來る。その間にやがて冬が來る。雪と寒さといふ新手の味方が加はる。如何に强力な獨軍も結局はナポレオンの轍を踏まねばなるまい。(結局その通りとなつた)されば獨ソ開戰に當つて、ヒットラーの焦慮したことは、ソ聯軍が「クツーゾフ作戰」をとり、肩をすかしてさつさと逃げはせぬかといふことであつたといはれた。

ところが、スターリンは「クツーゾフ作戰」の逆を行き、トハチエフスキーの「進んで守る」作戰に出た。たゞ緒戰における大敗戰で「敵地に敵を擊ち」損じたが、しかし白ロシアやウクライナでは、到るところ頑强なる抵抗戰をつゞけた。あの大河を決した如き勢をもつて、おし寄せて來た獨軍を邀へて隨所に踏みとゞまり、血みどろの抗戰を展開したソ聯軍の抗戰振りのもの凄さには、さすがの獨軍も驚いた。獨軍は當時その眞相においてさへ、屢々ソ聯兵の强靱性、そのねばり力の强さに言及し「ソ聯軍は到るところ頑强執拗な抵抗、反擊、逆襲を繰返し獨軍の進攻を阻止しよう

と懸命の死鬪を反復した〃と報じたものである。

かくしてソ聯軍は明らかに〃クツーゾフ作戰〃の逆手に出で、それがまた一時獨軍の思ふ壺に嵌まつたと見られ、また實際獨軍は到るところで、ソ聯軍に甚大な損害を與へることが出來た。しかしこれと同時に、ソ聯軍の頑强な抵抗にぶつかつた獨軍もまた大いにその戰力を消耗せざるを得ない。一氣呵成、電擊的にモスクワ攻擊を敢行する筈であつたフオン・ボツク軍は、中途にして八月末から九月にかけ、一息入れざるを得なかつた。しかしてこの〃一息〃こそ、相手のチモシエンコ軍に立直りの機會を與へたもの。十月に入つてフオン・ボツク軍は再び攻擊を始めたが、もう鉾先が鈍り、モスクワの手前まで來て、大頓挫に會した。スターリンがトハチエフスキーの積極防禦作戰をとつたことは、最初獨軍の思ふ壺に嵌つた如く見へたが、あとになつて、矢張りそれがモスクワとレニングラードを救ふ所以であつた。

さて以上の如きソ聯軍の頑强なる抵抗、いはゆる縱深戰術を展開するに當つて、常に大きな側面的應援の力となつたのが、パルチザンであつたといふことを見逃がしてはならぬ。

パルチザン戰術がナポレオン戰爭當時、大きな役割を演じたことは、史實がもの語つてゐる。さすがの大ナポレオンもパルチザンには手古摺つた。ロシアにおけるナポレオン軍敗退原因の第一は冬將軍、第二はモスクワの大火、第三がパルチザンであつたといわれてゐる。

しかしそれから時勢はすつかり變つた。今は戰車と飛行機時代である。科學戰の時代である。こ

うした武器の發達した今日、パルチザンの如き舊式なものは、もう役に立たないだらう。誰しもそう見てゐたのである。然るに豈計らんや、獨ソ戰爭において、パルチザンは、橫行闊步驚ろくべき活躍を演じ、獨軍に甚大な損害を與へた。ソ聯における作戰にはいつも地理的條件が伴ふ。パルチザンもまた然りであつて、ロシアでこそ時代おくれのパルチザン戰法が今でも役立つ地理的條件がある。それはロシア特有の密林地帶である。密林なかりせば、パルチザンはあれだけの活躍がなし得られなかつたであらう。然るに獨ソ戰場となつた白露地方やウクライナでは到るところ、幾千、幾萬キロ平方にわたつて鬱蒼と繁茂する森林が連つて居る。そこがパルチザンの巢窟であり、作戰基地である。そこに幾千、幾萬かのパルチザンが、馬や、小銃や、機關銃はいふまでもなく、戰車、大砲までかくしてゐる。ある森林では、飛行機を隱匿してゐたといふ。また、密林の中に無電を据えつけ、さかんに獨軍の動靜を報道した。

獨軍の戰車部隊があまりに急速に進擊したため、步兵部隊がおつつかぬことが多い。そうした間隙を狙つてパルチザンがあらはれ、獨軍の後方を脅威する。中には思ひがけない藪蔭から、突如獨軍行進中の戰車に飛びかゝるといふようなもの凄いパルチザンもあらはれた。

スターリン國防相は、パルチザン戰法の重要性を認め、自らこれが奬勵に乘り出した。こうした場合、宣傳に藝術を利用することが、スターリンの最も得意とするところである。即ち、スターリンは一方パルチザンを廣く表彰する、勳章を與へてその功績を讃賞すると同時に、他の一方さかん

にパルチザン文學を奬勵した。

獨ソ戰爭中、パルチザンを題材にした幾多の小說や戯曲が出た。パルチザンには個人の冒險が多い。しかも活躍する花形の中には、うら若い女性が少くない。また被占領地のことであるから時々悲慘な悲劇が演ぜられる。パルチザンはかくして作家のために豐富な題材を提供した。

獨ソ戰爭まさに酣の頃に出版され、舞台や銀幕に上演されたものゝ中で、特に優秀な傑作として知られたパルチザン題材の小說は、レオニード・レオーノフの〝侵入〟、ワンダ・ワシレフスカヤの〝虹〟コンスタンチン・シモーノフの〝ロシア人〟である。一九四二年七月、ウクライナのドンバス攻防戰で、記事輻輳のさ中に、プラウダ紙は、毎日全頁を割いて〝ロシア人〟を連載した。なるほどシモーノフの傑作だけあつて、中々面白い。南露の戰場で、ソ聯軍最前線のある部隊が獨軍に占領された町や村へ、第五列を忍び込ませ、パルチザンと連絡をとり、また獨軍を欺瞞して、巧みに戰略上の要地を奪回するといふ場面を描き出したものである。この一篇の主眼ともいふべきところは、部隊長から、〝敵の背後に侵入して、獨軍に虚僞の情報を提供し、謀略にかけよ〟との秘密命令を受けた第五列のロシア人が、袂別、否、死別に當つて一盃のウオッカを飲みほし乍ら〝ウオッカで元氣づけようといふのではない。寒いから一盃傾けただけのことだ。わしに元氣をつけるのは歌だ。酒でなくて歌だ！〟といふ捨台詞をのこして戸外に出て行く。すると外から〝鶯！（ソロウエイ）〟〝鶯！（ソロウエイブタシエチカ）小鳥！〟の朗らかな歌が聞えて來る。部隊長は傍らの一士官を顧みて〝君！　あの歌を聞いたかね？　ロシア人はこうして歌ひ乍ら死地に往くのだ……〟ロシア人の愛國の熱情と運命主義とが眼のあたりにありゝとあらはれて來る……

スターリンはシモーノフに月桂冠賞十萬ルーブルを與へ〝ロシア人〟をプラウダ紙に連載を命じた。蒼しロシア人の祖國愛、犧牲心を鼓舞し、危險な第五列やパルチザンの任務に勇往邁進せしめる上において、たとへば黨の宣傳班員などが擊を枯らして熱辯をふるひ、勸說に奔走するよりも、こうした一篇の藝術的作品の方が、遙かにより力强く、より効果的のものであるといふところに、スターリンが着眼したのであらう。

但し戰時こうした傑作で御用をつとめ、スターリン賞を授與されたシモーノフも、戰爭が終つて間もなく、日本や米國に遊んだことが祟つたのか、歐米かぶれの肅清に際し、あつさり作家聯盟から追放された。

第二十三章　勝利への轉換

一　小說〝前線〟

コンスタンチン・シモーノフの「ロシア人」と相並んで、ソ聯戰爭文學の双璧といはれたのが、アレクサンドル・コルネイチエクの〝前線〟である。〝前線〟は戯曲として「ロシア人」ほどの面白味がない。藝術味も少いが、その代り政治的意義のあくまで深刻な點から見ての傑作である。或は誰かゞコルネイチエクをし一特にあゝした筋書の作物を書かせたのではないか。それともコルネイチエクの獨創がスターリンの方寸にピタリと合ひ、そこで俄かに評判となり、ブラウダが狹い紙面を思ひ切つて割いたのではあるまいかともいはれている。シモーノフと同じく、コルネイチエクもまた月桂冠スターリン賞を授與された。否、それのみでなく、かれはその後間もなく外務人民委員代理といふ要職に拔擢されるといふ破格の表彰にあづかつた。然らば〝前線〟といふ戯曲は、如何なる筋書か。

ある正面を擔當する軍司令官ゴルロフ將軍は、內亂戰當時數々の武勳を樹て、赤旗章を四つも授與されたほどの古つはものである。しかし彼はたゞ內亂戰當時のように精神力だけで勝てると

いふ信念にとらはれ、最新式の科學や武器や戰術を眼中におかない。然るにその部下のオグニエフ部隊長は、若いだけに內亂戰當時の武勳もなければ、從つてまた勳章ももたない。然し新しい教育を受けただけあつて、科學を重視し、新式の戰術で行かうとする。そこで司令官と部隊長との間に意見がどうしても合はない。さていよ〳〵戰機が熟した。若き部隊長は老司令官の命令に服すべきか否かに苦惱してゐるところへ、中央から部隊長の作戰計劃採用の命令が來た。部隊長は勇躍して自家の作戰方針通り攻勢に轉じ、勝利を博する。やがて老司令官は罷免となり、若き部隊長が一躍して司令官に拔擢される……

といふ一寸見たところ極めて單純な筋書であるが、そこにスターリンの軍制刷新上の重大なる政治的宣傳が織り込まれているのであつた。

第一次夏の陣において、ソ聯軍は中央、南西、西北三方面とも隨所に大敗した。西北正面軍を率ゐたのはウオロシーロフ元帥、南西正面軍司令官はブデヨンヌイ元帥、中央正面に當つたのがチモシエンコ元帥である。三元帥とも內亂戰當時の殊勳者で、みなその胸間に、幾つかの赤旗章をならべている。しかし彼等はもう近代戰の指揮官として適しない。頭がふるい、しかも自惚れが强い。勇氣はあるが、精神力だけでは、近代戰に勝てない。果して、第一次夏の陣では、三軍ともに慘澹たる敗戰の憂き目に會した。特に最もみじめであつたのは、南西方面軍を率ひたブデヨンヌイ元帥である。そこでスターリンはこれ等內亂戰時代の舊式將軍では、到底最新式の科學と戰術で鍛へあ

げた獨軍武將と太刀打ち出來ぬと考へたらしい。彼はコルネイチエクの戯曲〝前線〟を利用して、巧みに舊式將軍の退陣、若手の新進將軍拔擢の宣傳工作をやつたのである。かうした宣傳のあとにすぐその實行に移るのがスターリンの常套政策である。果して、ウオロシーロフとブデヨンヌイは後方豫備隊の訓練係りに引かせ、また開戰當時の參謀總長シヤポシニコフ元帥にも引退を命じ、その後にジウコフ、ウオロノフ、ワシレフスキー、ワツーチン、ロコソフスキー等々の新進武將がとつて代ることゝなつた。シヤポシニコフ元帥に代つて參謀總長となつたワシレフスキーの如きは開戰當時少將に過ぎなかつた。然るに一年有半にして早くも元帥となり、作戰の中樞に當ることゝなつた。即ちウオロシーロフやブデヨンヌイが戯曲「前線」の〝老司令官ゴルロフ大將〟に、ジウコフやワシレフスキーが〝若きオグニエフ部隊長〟に當るわけである。戯曲「前線」の最後の幕で軍附政務官が、老軍司令官に、罷免の命令を渡すに當つて、

貴官は勇敢な武將だ。われ等の偉大な事業に忠實なる人だ。それ故貴官は尊敬されている。しかし敵に打ち勝つには、それだけでは不充分である。勝利のためには、更に近代式に戰ふ手腕、近代戰の經驗によつて學び、若い幹部を押しのけるのではなくて、かれ等を育成する手腕が不可缺である。しかるに貴官はさうした能力を缺いでいる。勿論老將といへども、進んだ戰爭の經驗に學び、修練をつむことを恥辱とさへしなければ、むしろ若い者以上に、近代戰の權威者となり得るであらう。古諺にも〝生涯學び、棺を負ふて然るのち止む〟といつている。貴官の如き老司

令官達が學ぶことを欲せず、自惚れにとりつかれ、しかも自ら十分に學んでゐると信じている。そこにすべての禍根がある、貴官の大きな缺點がそこにあるのだ……

との意味深長な說諭を加へ、また若き部隊長に對しては、軍司令官に拔擢の命令を手渡し乍ら、

スターリン首相は、若い有能な司令官は年とつた司令官と相並んで指導的任務に思切つて昇進させるべきであるといつている。近代式に戰ふ能力あるもの、舊式ではなく近代戰の經驗を學びとる能力のあるもの、修養し前進する能力のあるものを昇進させねばならぬ。これがスターリン首相の方針である……

云々とのクレムリンの指令を傳へている。かうした戯曲の中の〝二つの訓諭的指令〟で、前線指揮官異動の前觸れ宣傳を行ひ、その直後に舊人馘首、新人登用を思ひ切つて斷行した。今次の對獨戰におけるスターリン戰爭指導における最も大きな、そして巧妙な措置はその小說利用の人事異動であつたとしなければならぬ。このスターリンの新人拔擢と科學尊重の大英斷こそ、ソ聯をして敗戰から勝利へ轉換せしめた最も有力な動機の一つである。

二　赤色ウエルダン

一九四二年六月、第二次夏の陣に入つて、スターリンは南部方面軍司令官ブデヨンヌイ元帥を後退せしめ、その後任として、前西部方面軍司令官チモシエンコ元帥を任命した。これと同時に、ヒ

ットラーもまたフオン・ボツク元帥をして、中央正面軍司令官からウクライナ正面軍司令官に轉出せしめたので、第一次夏の陣でナポレオン街道に死闘を展開したチモシエンコとフオン・ボツクの二人の好敵手は、第二次夏の陣において再びウクライナで會戰することゝなつた。また今年もチモシエンコはあの頑強な抵抗、反攻、逆襲を繰り返すことだらうと見られていた。然るに意外にもチモシエンコ軍はウクライナをあつさり退却してしまつた。この時、世界の疑問となつたことは、ウクライナの中心のドンバスを〝寶庫の中の寶庫〟といはれているドン河の盆地炭田を、どうしてあのやうに、無雜作に退却したのだらうといふことであつた。

第一次夏の陣で、あれほど頑強に死にもの狂ひになつて頑張る、ねばるといふことで有名になつたチモシエンコ元帥は、第二次夏の陣に入つて、それとは正反對に、フオン・ボツクの最初の一撃を喰つただけで、さつさと退却してしまつた。勿論それはチモシエンコ元帥單獨の決斷によつたものでなく、スターリンの命令に從つたものであることはいふまでもない。第一次夏の陣に〝一木一石に嚙りついて〟といふ厳令を下したスターリンは、第二次夏の陣に入つて、次のやうな命令を下した。

司令官の任務は、敵の包圍を回避するやう作戰を指導することである。これは一寸の土地といへども、敵手に渡すまいとすることよりも重大なことである。司令官は如何なる犠牲を拂つても陣地を死守するといふような野心に耽溺すべきでなく、不可避の場合には適時退却して、屈伸性

ある防禦を行はねばならぬ。

即ち退却しても可なりといふ命令である。スターリンは何故こうした命令を下したのだらう。第一の動機としてあげられたのが〝戰術の變化〟である。いつも同じ戰術を繰返してゐると〝またあの手か〟と見すかされてしまふ。變化あつてこそ戰術であるのである。スターリンは前年の〝進んで守る〟作戰から、今年は〝退いて守る〟作戰に變つたのである。然らばスターリンは何故トハチエフスキーからクツーゾフに變つたか。その一つの動機は、開戰第二年目のウクライナは初年のウクライナと違ふ。國内の工業施設は悉くウラルへ移されてしまつた。もう内容がからつぽになつているウクライナを、死守する必要はない。今一つスターリンがウクライナ退却を決意した重大原因は、あとで、ウオルガ河の線で獨軍の進攻を喰ひ止めよう、文字通り〝退いて守る〟方針をとつたことにあるとしなければならぬ。

果せる哉、獨軍長驅ウクライナを席捲してウオルガ河岸に達した時、それまで退却又退却を續けてゐたソ聯軍はスターリングラードに至つて俄然踏みとゞまつた。そこで再び頑強無比の死守戰を始めた。

昔からウオルガ河を支配するものは、ロシアを支配するといはれている。そしてスターリングラードは同河の下流と中流を結ぶ沿道隨一の要衝である。即ちスターリングラードを支配するものは、ウオルガ河を支配するのである。

スターリングラードの重要性は、いはゆる〝三大穀倉の鍵〟を握つている點にある。即ちスターリングラードはウオルガ河沿岸の穀物の外に、ウクライナ及び北コーカサスの穀物も併せて集合するところである。スターリングラードを喪失することは、この三大穀倉の穀物を敵手に渡すことになる。スターリンがスターリングラードに至つて退却停止の嚴命を下したのは、決して單なる〝スターリンの都〟の名にとらはれたものとのみなすわけに行かぬ。

獨軍は素早くもスターリングラードに迫つた。空中と陸上兩方面から、いわゆる立體作戰の猛攻擊を加へ出した。然しこゝまで來ると獨軍後方の輸送路があまりに遠くなつた。他の一方、抵抗せずに退却したから、ソ聯軍は消耗してゐない。ソ聯軍のスターリングラードにおける抵抗は頗る頑强を極めた。

スターリングラードの攻防戰は、一九四二年の秋、九月に入つていよ〳〵熾烈となつた。獨軍は空爆と砲擊によつて、あらゆる障害物、防禦物を破壞してつき進む。ソ聯軍また建物一軒一軒、否な煉瓦一つ一つを楯にして死守する。兩軍の間に、一進一退の凄絶慘絶の肉彈戰が展開する。全市刻々焦土となつてゆく。隨所に屍山が築かれる。同月三十日、ヒツトラーが〝ス市斷乎攻略〟を獅子吼すれば、スターリンまたス市防衛軍に〝最後の一兵まで抗戰せよ〟と呼びかける……

十月一日には獨空軍一千機大擧して、ス市の中央部目がけて爆彈の雨を降らせた。十月の半ばに至つて、攻防戰は文字通り白熱化した。ソ聯軍は續々豫備隊を繰り出し、獨軍の猛火中に投げ込む

ソ聯軍の死傷は毎日六千、七千を算する。

十月八日獨軍はス市防衛軍に投降勸告のビラを上空から撒布したが、一向動搖する氣配もない。十月中旬、獨軍は空陸聯合のスターリングラード總攻擊を反復し、漸やく十四日〝赤色バリケード大砲工場〟二十四日〝赤色十月工場〟の占領に成功した。

かくしてスターリングラードの大半は、獨軍の手に歸したが、その一角にたて籠つたソ聯第六十二軍の抵抗は一向衰へさうもない。同軍の死守する橋頭堡は、打てどたゝけど、びくともしない。ソ聯軍は死を恐れず、犧牲を惜まず、戰友の屍をもつて壘として死守する。もう十月も末に迫つた。十一月に入れば冬將軍が來援する。それまではどうあつても頑張らう……スターリングラードはまさしく〝赤色ウエルダン〟になつてしまつた。さてその十一月が到來した。十一月六日の十月革命二十五週年の記念日の前夜、スターリンはクレムリンで長廣舌を揮ひ、米英に向つて、第二戰線の構成を督促し、ソ聯軍全將兵に訓令を發して對獨抗戰完遂を要望し　併せて特にパルチザン遊擊戰强化の要を說いた。

三　スターリン反攻

一九四二年十一月十九日、スターリングラード正面のソ聯軍は、ロコソフスキー大將の指揮下に突如大規模な攻擊作戰の火蓋を切つた。その砲擊といひ、空爆といひ、白雪僞裝の突擊部隊の鉾先

といひ、もの凄い勢ひであつた。この日から獨ソ戰爭は第二次冬の陣に入り、スターリングラードの獨ソ兩軍は攻防その地位を替へた。

スターリンが如何にこの作戰に重きをおいたかは、これに自分の名をつけ〝スターリン反攻〟と呼んだことによつても推すことが出來よう。

何しろ冬將軍の來援を得たソ聯軍の意氣込みはもの凄い。これに反して、冬になると獨軍の士氣が沮喪する。それに第二次夏の陣におけるスターリンのクツーゾフ作戰は、第二次冬の陣に入つて漸やくものをいふようになつて來た。ソ聯軍が遠くウオルガ河の線まで退いたために、ドイツ軍は懸軍萬里、そろ〳〵疲れて來た。その後方輸送路が無暗に遠くなつた。それだけソ聯軍にとつて反攻逆襲し易くなつた。加うるに第二次夏の陣の前半において、前年夏の陣におけるが如きがむしやらな頑强抵抗を試みず、さつさと退却したので、死傷者が少かつた。捕虜もあまり出さずに濟んだ武器彈藥の消耗が極めて僅少であつた。それ故スターリングラードに踏みとゞまつた時、ソ聯軍には相當頑張るための戰力がのこつてゐた。まだ手のつかぬ豫備隊もあり、防禦に事缺かない。否、やがては、冬の到來とともに、反攻逆襲に轉ずるだけの餘力を保持することが出來た。

ロコソフスキー軍は最初スターリングラードを南と北の兩方から攻めたてたが、獨軍の抵抗頑强にして、攻擊を効を奏せず。こゝにおいてロコソフスキーは、最後の手として、西の方からスターリングラードの中央目がけて衝いて出た。この攻擊はス市防禦陣の急所を衝いたらしく、獨の第六

軍は南北の二兵團に分斷されてしまつた。南部兵團はパウルズ軍司令官自ら指揮をとり、北部兵團はスドウシカ大將これを率ゐ、惡戰苦鬪を續けたが、何しろ無援孤立である。ソ聯軍はドシ〳〵豫備隊をつぎ込み、晝夜間斷なく攻擊を續ける。一月三十日ヒットラーはパウルズ大將に元帥號を贈つた〝玉碎せよ〟といふ命令であつたらしい。南部軍は二月一日、北部軍は二月二日、それ〴〵その最後の無電を打つた儘刀折れ矢盡き、本國との通信を絶つてしまつた。ドイツは國をあげて、三日間歌舞音曲をやめて〝スターリングラードの悲劇〟を記念した。

一九四二年冬の〝スターリン反攻〟は上記の如く、スターリングラードの奪還に、目覺ましい勝利をかち得たと同時に、北方レニングラードの包圍突破作戰においても成功した。レニングラードは一九四一年の秋早くも獨芬連合軍のために陸上三方面から包圍されてしまつた。レニングラードそのものと、その籠城軍五十萬の運命は、スターリン苦惱のたねとなつてゐたが、レ市には彼の最も信頼する黨支部長ジユダノフがゐる。彼の命令一下、ラドガ湖氷上の輸送で、糧秣彈藥の補給が決行され、市民と籠城軍は辛うじて蘇生することを得た。一九四二年秋、一旦前線から引退したウオロシーロフ元帥が籠城軍の司令官に返り咲きし、ウオルホフ方面軍を率ゐて外側から應援したジユウコフ元帥と相呼應して先づシニリツセルブルグを奪還し、包圍軍の一角を突破した。ついでチフビン・ウオロゲダ經由の鐵道を占據して、モスクワとの連絡打開に成功した。

〝スターリン反攻〟はかくして南はスターリングラード、北はレニングラード作戰において見事

な勝利を博した。この反攻の成功は實に獨ソ戰爭における大きな轉換であつた。ソ聯から見て、敗北から勝利への大轉換であつた。

四　第二戰線の結成

對獨戰爭中、スターリンの最も苦慮した問題の一つは、如何にして米英の援助と協力を得るかといふことにあつた。五ケ年計畫は相當の成績をあげた。ウクライナの各工場は適時巧みにウラルへ移された。とはいつても自國の生産だけではとても間に合はない。米英からの補給が、何より肝腎である。しかし米英は自國の需要も中々大きい。ソ聯へ手が廻らぬ。そこでソ聯として、無理を押しても米英の力を引き出さなければならぬ。

一九四一年十一月七日、第二十四次十月革命記念日に、陪都クイブイシエフにおいて、戰時下の大觀兵式が行はれた。元國防相ウオロシーロフ元帥が閲兵するといふ觸れ込みである。どんな仰々しい觀兵式かと、各國使臣や武官など、多大の興味をもつて、式場へ出かけた。すると、こはそもいかに、兵力だけは三個師團ほど出して來た。しかし殆んど徒歩部隊ばかりである。しかも肩にしてゐる小銃は舊式で、且つ形式が區々である。兵士の年齢や人種もまち〳〵である。最後に機械化部隊が出て來た。しかしそれは秣草車に針金で舊式の迫擊砲や機關銃をゆわへつけ、痩せ馬にひかせてゐる。國內動亂當時に用ゐたタッチアンカ（小型のタンク）まがひのものや、農業用のトラク

ターで牽引する舊式野砲が、臆面もなく機械化部隊として登場する……といふ思ひがけない光景がウオルガ河の川風吹き荒ぶサマラ廣場、居並ぶ外交團の前に展開された。

時は恰かも第一次夏の陣で、ソ聯軍が各正面で慘敗した秋である。この觀兵式に列した各國外交官、武官は、てつきり〝ソ聯軍弱つた〟と見てとつたらう。米英はこゝにおいてソ聯に思ひ切つて多量の武器を補給してやらなければならぬと考へたであらう。少くともスターリンとしてはそこへ持つて行くつもりであつたに相違ない。（當時の駐ソ大使建川美次氏談による）。

その翌年第二次夏の陣で、前記の如く、南西正面を引き受けたチモシエンコ元帥は、前年夏ナポレオン街道の頑强抵抗とは打つて變つて、ウクライナを、ドンバスをさつさと退却してしまつた。これはソ聯軍がいよ〳〵弱つた證左に相違ないと、驚ろいたのは、當時の英國宰相チャーチルである。彼は自らモスクワへ飛んで行つた。一九四二年八月十二日から十五日にかけて英ソ會談が行はれた。

チャーチルとスターリンは何を議したか。チャーチルはソ聯軍の頑强抵抗を、スターリンはその交換條件として、英軍の歐洲大陸上陸、即ち第二戰線の結成を、双方から持ち出し、チャーチルから速急第二戰線形成の約束を與へたものゝ如く傳へられた。そして八月十九日、英軍はデユエツブに上陸を試みた。これはいふまでもなくスターリンに與へた約束履行の名の下にやつたものに相違ない。しかしデユエツブ上陸作戰は小規模のものであり、從つて第二戰線結成の目的を達するに至

らなかつた。

その後あらゆる機會に、スターリンが第二戦線の催促を繰返したのであるが　大規模の米英上陸作戦は、準備なくして決行され得るものでない。

〃スターリングラードの悲劇〃以來、獨軍は戦力も士氣も著しく低下した。第三次夏の陣には、七月五日ベロゴーロドとオリヨールの二地點で部分的攻勢に出たばかりである。この獨軍攻勢を喰ひ止めた勢ひに乘じ、ソ聯軍が逆に攻勢をとり出した。

獨軍はもう緒戦の時のような電撃作戦はやらない。漸次消極作戦に移つた。〃居坐り戦術〃〃獨樂戦術〃〃出血戦術〃〃柔軟戦術〃などいふ一ヶ所に止まつて、敵に損害を與へる方針に變つた。一九四三年の冬は例年より著しくおくれ、從つてソ聯軍が本格的に冬の攻勢に轉じたのは、十二月末におし迫つてからのことである。

十二月二十四日のクリスマス前夜を期して眞先きに冬季攻勢に轉じたのが、ワツーチン大將麾下の第一ウクライナ方面軍である。人馬はいふまでもなく、大砲も戦車も悉く白裝束の僞裝をこらしコロステンとベルヂチエフの中間百キロの線にわたつて一齊に攻撃の火蓋を切つた。ワツーチン軍の攻撃はいつもの通り猪突一點張りであるが、これを邀へたマンシタイン軍は、いはゆる柔軟戦術を用ゐ、攻撃軍に甚大なる損害を與へつゝぢりぢり舊ポーランド國境の線に退避作戦、撤收作戦を遂行した。一月末に至つて、ソ聯軍は北はイルメン湖の南方、中部はスモレンスク・オルシヤの線

南はニコーポリとチエルカツスイを兩翼とするドニエープル河の大彎曲部において、攻勢に轉じたかくして、ソ聯軍は第三次夏の陣から冬の陣にかけ、八ヶ月にわたる攻撃作戦を無理押しに押し、白ロシアの一部と、ウクライナの大半を奪還し、舊ポーランド領の一部と、ルーマニア領の一角に突入することを得た。しかし同時に獨軍の巧妙なる柔軟戦術と出血戦術によつて、莫大なる損害を蒙つた。

加ふるに一九四三、四年の冬は、稀有の暖かさで、二月半頃すでにドニエープル河下流の一部解氷を見た。ソ聯のたのみにしてゐた〃冬將軍〃は早くも退場し、〃泥濘將軍〃がやつて來た。ソ聯軍のあて外れはそれだけに止まらない。もう一つスターリンが鶴首して待ちに待つた米英の第二戦線は、つひに第三冬の陣中に展開されるに至らなかつた。

五　モスクワの祝砲

待望の米英上陸作戦は、一九四四年の六月、つひに北佛海岸において、大規模に敢行された。やがて第二戦線は本格的に構成され、ドイツ軍はパリーをさへ抛棄して退却することゝなつた。これまで靜かなること林の如くであつたソ聯軍は、六月二十二日獨ソ開戦の記念日を期して塹壕から飛上り、勇躍して、總攻勢に轉じた。獨ソ戦第四次夏の陣は、徹頭徹尾ソ聯軍攻め且つ進み、獨軍守り且つ退くのみであつたことはいふまでもない。ドン河から、ドニエープル河へ、ドウイナ河へ、

ドニエストル河へ、プルート河へ……やがて獨軍は自國の國境を越え、ついでオーデル河を、そしてシュプレー河を渡つて退却又退却を續けた、その度毎に、モスクワはクレムリンの一角や、ゴリキー公園等で、祝砲が轟然と響きわたる。

當時のソ聯軍は文字通り朝に一城を奪ひ、夕に一城をとるといつた勢ひであつた。重要都市奪還毎に、祝砲を打てと、スターリンから命ぜられたモスクワ留守部隊の砲兵は中々いそがしい。一九四四年の冬から一九四五年の春にかけて毎夜の如く、砲列は祝砲を打つて、戦勝を報道するのであつた。

戦勝ほど指導者、爲政者にとつて、國民の間の聲望をあげる好機會はない。スターリンはさうした好機會を決して見逃がさない。モスクワの祝砲が殷々と響き渡る毎に、スターリンの人氣、聲望權威がいやが上にあがる。長い間徽章のない兵隊服を着てゐた黨書記長スターリンは、今や金モールでちりばめた元帥服に大きなダイア入りのボベーダその他の勲章を胸間に輝かせ、得々然とクレムリンにおさまつている。一九四五年五月、ソ聯軍は眞先きにベルリンに入城し、ヒットラーとゲッベルスは總統官邸で悲壯なる最期を遂げた。

第二十四章　世界を舞臺に

一　テヘランとヤルタ

米英ソ三國巨頭第一次會議は、イランの都テヘランに開かれた。テヘランは本文の記者の會遊の地である。同市の一隅に、ソ聯の大使館が公園の如き大庭園を畫してゐる。曾て私はそこでユレネフ大使を訪ねたことがある。

一九四三年秋十一月、一足さきにテヘランへ着いて、同大使館に腰をおろしたスターリンは、亞日飛行機で空路イランへやつて來たルーズベルト大統領に〝テヘランにはよいホテルがない。弊國大使館は設備は粗末だが、手廣いから、不自由でもイラン滯在中拙者の客となつてくれぬか〟と持込む。ルーズベルトは〝それは忝けない。遠慮なく御厄介にならう〟と快諾し、氣輕にソ聯大使館に投宿した。そこでスターリンとルーズベルトの主客二人は、公式の會議の席で顔を合す外に毎日一度か二度食事を共にする。ベランダで茶をのみ乍ら雑談に耽ける。その間にスターリンとルーズベルトはすつかり氣のおけない仲よしになつてしまつた。テヘランのソ聯大使館における主客二人の間にサモワールを圍んでの談笑裡に色々な取引が行はれたらしい。どちらがより多くをかち得た

かは判じ難いが、とにかくこの會議後米國の對ソ武器供給はいよ〳〵活潑となり、また同時にソ聯軍の對獨作戰は、快調でぐん〳〵展開した。

一九四五年々頭、第二次三國巨頭會議は、ソ聯領クリミア半島の南端ヤルタで開かれた。ヤルタは帝政時代の離宮のあるところ、その離宮が米英全權の宿舍となりまた會議場となつた。スターリンはローザ夫人同伴でヤルタに飛來し、會議開催中ヤルタ離宮の主人主婦として遠來の珍客に對し歡迎接待これつとめた。

ヤルタでもまたスターリンの相手はルーズベルトであつたらしい。戰後外紙が報道したいわゆるヤルタにおける米ソ密約が事實であればスターリンの成功と見なければならぬが、しかしまたルーズベルトもつひにソ聯を對日戰爭に引出すことに成功したわけで、ヤルタ會議はかくして日本の運命を決した。

第三次三國巨頭會議は一九四五年夏、ドイツのポツダムに開かれたが、この會議には、もうルーズベルトあらはれず、チヤーチルもまた同會議の直前、政權を勞働黨に奪はれ、顏を見せない。テヘランとヤルタ會議の相手の二人ポツダムに來らず、スターリンは聊か淋しかつたことであらう。

二　鐵のカーテン

一將功成つて萬骨枯る……は陳腐な語であるが、戰爭の犧牲ほどはかり知れぬものはない。今次

の大戰におけるソ聯軍の死傷は、恐らく一千萬を越えたであらう。ウクライナは全土を擧げて戰禍にかゝり、到るところ都市村落は廢墟と化した。しかし戰勝の結果は更に驚くべきものがある。バルト三國とベツサラビアの舊帝制時代の領土は手早く取返した。カレリヤ地峽とポーランドの東半もソ聯の領土に色をかへた。それのみでなく、聯邦の西隣地域は北はフインランドから南はブルガリヤに至るまで、ポーランド、チエコ・スロワキア、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラヴイア……の七ケ國をわが衞星國となし、その西の國境にいはゆる鐵のカーテンをおろした。鐵のカーテンの內側には、西歐の勢力浸透を、斷じて許さない。たゞフインランドとチエコ・スロワキアだけは、つひ一九四八年の春までは、相當な獨立性を保ち得たが、同年六月プラーグに政變おこり、チエコの共產黨の首領ゴーツワルトが大統領ベーネシュをおしのけて、政權を握つた。つゞいてフインランドもまたソ聯から相互防衞協定の締結を强ひられ、先づ軍事的に半ばその獨立性を失ふことゝなつた。スターリンはかくして、ソ聯領內の一億七千萬人の上の獨裁權を確保したばかりでなく領外、鐵のカーテン內の七千餘萬人に對して號令することゝなつた。レーニンからビヨートルへ……を目標にして乘り出したスターリンはピヨートル大帝やエカテリナ女帝の經綸をもつてして、なほ且つ果し得なかつた海洋と、中歐への進出に見事、大なる成功をなし遂げた。

鐵のカーテンは、西歐方面ばかりでない。極東においても、外蒙と一部の內蒙朝鮮、の北半、滿洲と北支の一部、否、中共の勢力範圍はすべてこれを鐵のカーテンの內側にあると見なければなら

ぬソ聯の勢力膨脹たゞたゞ張目して驚ろくの外ない。

三　コミンフオルム

一九四八年九月、元チエコ・スロワキア大統領ベーネシュの死後、生前ベ氏の秘書であり、モスクワへもベ氏に同行したタボールスキー博士は、ベーネシュについて色々の記錄を發表した。その中の一節に、

一九四三年十一月ベーネシュ大統領がモスクワでモーロトフを訪問し、チエコの國内情勢を報告したところ、モーロトフは〝そのやうなことはソ聯の關知するところでない。ソ聯はすでにチエコとの間に、内政問題に介入せずとの原則を規定した協定に調印ずみである〟

といひ、さらに、

〝ソ聯は西歐諸國の間にソ聯が東南歐に干渉する意圖があるのではないかといふ疑問がおこつてゐることを知つてゐる。しかしソ聯はよその國の國内問題をだれかから聞き出すことはもとより、これを問題にすることさへ絶對に避けるといふ原則を守り通すつもりだ〟

とつけ加へた。とある。ソ聯はその三年後の一九四六年ベルグラードに各國共産黨代表をあつめ、コミンフオルムを創設し、この新機關を通じ、當該國の共産黨を自由に動かしてゐる。

コミンフオルムはコミンテルンの復活ではないといはれてゐる。その名の示す如く、お互ひに情

報を交換するのが目的であつて、コミンテルンの如く、各國の共産黨を指揮する機關ではないといふのが、その頃モスクワから放送されたコミンフオルムについての説明であつた。然るに一九四八年六月ブカレストで開かれたコミンフオルム大會において、ソ聯代表ジュダノフは、

チトー元帥始め、ユーゴ・スラヴィアの指導者は誤つた對内、對外政策をとるとともにソ聯に對して大ブルジョア諸國に對すると同樣の外交政策をとり出した。彼等は政治的過誤を犯し、マルクス、レーニン主義の理論を無視し、ブハーリンと同樣の誤りをなした……

云々とて、チトー元帥とユーゴ・スラヴィア共産中央委員に對し手嚴しい糾彈演説をなし、大會は同演説を基礎としてチトー元帥等をコミンフオルムから除名する決議をなした。

コミンフオルムはかくして各國共産黨に對し、命令し、詰責し、除名し得る立場にあり、決して單なる情報交換だけの機關でないことが明白となつた。即ちスターリンはコミンフオルムを介して衛星各國に號令することゝなつたわけである。さらにドイツのソ聯地域においても同樣の、排他政策をとり、一九四八年六月からベルリン封鎖を始めた。ベルリン封鎖問題は、米英佛側をして、モスクワに協同抗議を提起せしめたが、三國代表とスターリンとの直接交渉も、妥結を見出すに至らず、とう〳〵同年九月末パリで開催された國連總會の問題となつた。

四　〝冷い戰爭〟

大戰が幕をおろしてから、半年とたゝぬ中に、ソ聯と米英の間に、色々な問題が起り、いはゆる〝冷い戰爭〟が始まつた。終戰の歳の一九四五年の秋、ソ聯軍が近東ではイラン、極東では滿洲から容易に撤兵を肯んじない。却て增兵する氣配さへ見へた。イラン政府は〝首都テヘラン危ふし〟と悲鳴をあげた。米英は聯合して、モスクワへ强硬な抗議を提起した。一時はどうなることかと危ぶまれたが、最後にクレムリンはあつさり、讓步し、ソ聯軍はイランの北部を撤退し、同時に滿洲では奉天一帶からハルビン方面に引揚げ、漸やく事無きを得た。しかし一九四六年には、ギリシアに叛亂がおこつた。マルコス赤色將軍の率ゐるパルチザンが北部ギリシアに出沒し、時々アテネを脅かすことがある。また北朝鮮における共產黨はいよ〳〵牢固たる勢力を張り、ソ聯軍が撤兵しても、大丈夫だといふところまで、深く根をおろしてしまつた。中國においては中共軍が一時延安を拋棄したので、沒落かと見たものもあつたが、間もなく、その根據地を滿洲に移し、そこから中國の北部と中部に手をのばし、更に急速に南下して遂には蔣介石に匕首をつきつけてゐる有樣である。

こうした新情勢に直面して、眞先に警鐘を打鳴らしたのは前英國宰相チャーチルである。チャーチルは大戰中こそ、テヘランやヤルタでスターリンと圓卓をかこみ、また自らモスクワまで出かけて、ソ聯との同盟强化に奔走したが、元來スターリンとは主義の敵である。一方は極左の共產黨首

何を語るか？　ベルリン會議における米ソ巨頭
即列左よりスターリン、トルーマン、バーンズ、モーロトフ

18160

雷、他方は極右の保守黨リーダーである。そりが合ふ筈がない。大戰終つて間もなく、チャーチルは米國に遊び、ある大學に招かれて、一場の講演を試みた。その一節に、

ソ聯戰後の勢力伸張は眞に驚ろくべきものがある。世界の英國語國民は、一致團結して警戒の陣を張らなければならぬ……

と喝破した。政權を失つても、なほ且つチャーチルの一言一句は、全世界に反響をよびおこす。これを聞いて最も激しく昂奮したのは相手のクレムリンである。スターリンは、

チャーチルはまたしても挑戰を始めた。戰爭の火付役チャーチルを罵れ……

と、スターリンには似合はぬ激越な言葉をもつて應酬した。

こうした新情勢に直面して、ソ聯は如何に對處するかは全世界の注視の的であり、日々に發展する風雲をにらんで、クレムリンの主人公スターリンの一擧手一投足は世界を動かす大きな鍵である。

スターリン傳
定價百八十圓

昭和二十四年二月一日 印刷
昭和二十四年二月十日 發行

著者 布施勝治
東京都豐島區雜司ヶ谷一ノ三九二
發行者 立花忠保
東京都中央區茅場町一ノ六
印刷者 原川力
東京都豐島區雜司ヶ谷一ノ三九二
版元 燈下書院

(梁工章日)

289
ST 2

終